

VIEW21

ビュー21

2014

Vol. 1

中学版

特集

言語活動を通じて高める生徒の力

——新教育課程の中間総括として

学校事例 東京都立川市立立川第二中学校 / 広島県福山市立向丘中学校
佐賀県小城市立三日月中学校

インタビュー 東京女子体育大常任理事・教授 田中洋一

研究報告 高校入試の出題傾向から見る言語活動の重要性

私を育てた
あの時代、あの出会い

全てを任せられ試行錯誤した経験が指導の幅を広げてくれた
山形県酒田市立第三中学校校長 太田英一

Benesse発
これからの教育

電子黒板を日常的に活用し、手法は教科を超えて共有 北海道北広島市立東部中学校

ミドルリーダーの挑戦
一前へ! 前へ!!

自分らしさを生かした指導で生徒の自主性や意欲を引き出していく
東京都豊島区立千登世橋中学校 石川和代



特集

3 言語活動を通じて高める生徒の力

——新教育課程の中間総括として

4 課題整理

言語活動への課題と期待

6 インタビュー

生徒の考える力を伸ばし、学習意欲を高める言語活動の「7つの指針」

東京女子体育大常任理事・教授◎田中洋一

10 学校事例1

「根拠」に基づき、論理的に考え、表現する力を養う

東京都立川市立立川第二中学校

14 学校事例2

教材の分析から「型」を取り出し、考えを整理させ見通しのある活動に

広島県福山市立向丘中学校

18 学校事例3

生活に即した「リアルな問い」で言語活動を行い、定期考査で評価

佐賀県小城市立三日月中学校

22 研究報告

日頃からの5W1Hの問い掛けが生徒の心を耕し、考える力を育む

——高校入試の出題傾向から見る言語活動の重要性

特別レポート

30 小中高 教師が共に語り、オピニオンをつくる

Teachers' cafe 第2回ワークショップ開催



連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

全てを任せられ試行錯誤した経験が、指導の幅を広げてくれた

山形県酒田市立第三中学校校長◎太田英一

26 Benesse発 これからの教育

電子黒板を日常的に活用し、手法は教科を超えて共有

北海道北広島市立東部中学校

28 ミドルリーダーの挑戦 ——前へ!前へ!!

自分らしさを生かした指導で生徒の自主性や意欲を引き出していく

東京都豊島区立千登世橋中学校◎石川和代

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

全てを任せられ試行錯誤した経験が 指導の幅を広げてくれた

山形県 酒田市立第三中学校校長 太田英一 OTA EIICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、太田校長が語る。

就職1年目の私に
「研究発表を任せただぞ！」

思えば、20代でさまざまな経験を積み重ねられたことが、私の教員としての土台を築いたのだと思います。初任校ではいきなり1年生担任を任せられました。意欲だけは満々の私を指導してくださいだったので、朝井融先生です。先生は当時41歳、同じ学年の担任、教科も同じ保健体育科であり、新米の私に勉強させようという気持ちでいてくれたのだと思います。とにかく何でも任せてくださいました。5月頃、朝井先生に「本校が研

究当番校になった」とその担当者に指名されました。生徒の体力低下をテーマに研究し、秋には地区で、冬には県で発表しました。2年目は新教育課程移行措置中の保健体育のカリキュラム作成を命ぜられ、他教科は主任級の先生が担当する中、新米の私が教科での案を作ったのです。未熟でまだ指導方針も定まらない中、カリキュラム案を何度も作り直したりと試行錯誤を繰り返しながら、私は本を読みあさり、外部の研究会に参加し、とにかく勉強しました。朝井先生はそうした私のことをよく褒めてくださいました。同僚の



おおた・えいいち 専門教科は保健体育科。酒田市立第二中学校、鶴岡市立鶴岡第一中学校、庄内教育事務所などを経て、現職。部活動では主に体操部の顧問を務める。山形県中学校体育連盟体操専門委員長、副会長等も歴任。

1977 (昭和52)
酒田市立第二中学校
に新採で赴任。
朝井融先生と出会う

1979 (昭和54)
余目町 (現庄内町)
教育委員会
社会教育主事補に
着任。その後、
社会教育主事に

1983 (昭和58)
藤島町立 (現鶴岡市立)
藤島中学校に赴任

1990 (平成2)
鶴岡市立
鶴岡第一中学校に赴任

1994 (平成6)
山形県教育庁
庄内教育事務所
指導主事に着任

1998 (平成10)
三川町立
三川中学校に赴任

2000 (平成12)
余目町立 (現庄内町立)
余目中学校
に教頭として赴任

2002 (平成14)
山形県教育庁
庄内教育事務所
主任管理主事に着任

2005 (平成17)
松山町立 (現酒田市立)
松山中学校に
校長として赴任

2008 (平成20)
山形県教育庁
庄内教育事務所
管理主幹に着任

2010 (平成22)
酒田市立第四中学校
に校長として赴任

2013 (平成25)
酒田市立第三中学校
に校長として赴任

「進化の反意語は停滞、 常に一步先に行くことを考える」



先生方と飲みに行く際に私も誘い、私が授業で工夫していることや研究発表の内容などを、他校や他学年の先生に話してくれたのです。「頑張ってるな」それはよいアイデアだ」と先輩の先生方から声を掛けていただくことは、とても励みになりました。

朝井先生からは、生徒を幅広く見取る大切さも学びました。先生は特にやんちゃと言われる生徒から慕われ、その生徒が「親に言われたので」と差し入れを持ってくるほど、保護者の信頼も得ていました。先生は「生徒は1つではない。いろいろな面がある」とよく言われていましたが、私には見えない生徒の良さを、まさしく先生は見取っていたのだと思います。朝井先生の生徒とかわる姿勢は、自分の目標となりました。

初任校で学びたいことがまだまだありましたが、3年目に教育委員会に異動し、社会教育主事補となりました。当初は本意ではない仕事に戸惑いも多かったのですが、園児向けのダンスを創作したり、高齢者クラブの運動会を支援したりと、さまざまな年齢の人たちを指導することは楽しく、また勉強になりました。更に、学校の研究会でも指導や助言を担当し、発達段階を踏まえた体育指導を考えられるようになりました。

地域の人々とかかわり、学校をどう見ているのかを直に聞いたことは、私の学校観を大きく揺さぶりました。非難を受けた時には激しく反論したこともあります。でも、なぜ誤解されているのかと考えた時、学校はその様子を外に伝えていないのだと気付きました。学校はもっと社会にかかわるべきだ——若手時代に学校を外から見た経験は、私の学校教育の見方を変えたのです。

**教師の幅を広げることが
生徒の人生も豊かにする**

学校現場に戻り、いわゆる荒れの状態の学校に赴任することもありました。私は常に生徒の良さを引き出すこと、生徒が地域にかかわることを心掛けました。生徒が誇りを持てる学級づくりをしようと、体育祭や合唱大会などに全力で取り組んだところ、年度末に学級全員が賞状

を持てるほど生徒たちは活躍しました。また、地域の運動会に教員と共に生徒も毎年参加。種目に出場するだけでなく、会場の設営やゴミ拾いなど地域に根ざした活動をしていきました。生徒と直接かかわることによって、地域の方たちに生徒の良さを感じてほしいと思ったからです。そうして学校内や地域とのつながりを深めていき、それと共に荒れがだんだん小さくなっていきました。

教員自身の幅が広がれば指導の幅も広がり、それは生徒の人間的な成長に結び付くことでしょう。ですから、私がそうだったように、先生方にはいろいろな経験を積んでほしいと考えています。例えば、ずっと生徒指導を担当してきた先生に他の分掌をお願いし、出てきたアイデアを生かしながら、まず実践してもらっています。

言語活動を通じて高める 生徒の力

— 新教育課程の中間総括として

新しい学習指導要領が全面実施されて2年が経過した。

「言語活動の充実」が明記されたものの、

限られた授業時間数の中で言語活動を効果的に行うことは、
厳しいのが現状のようだ。

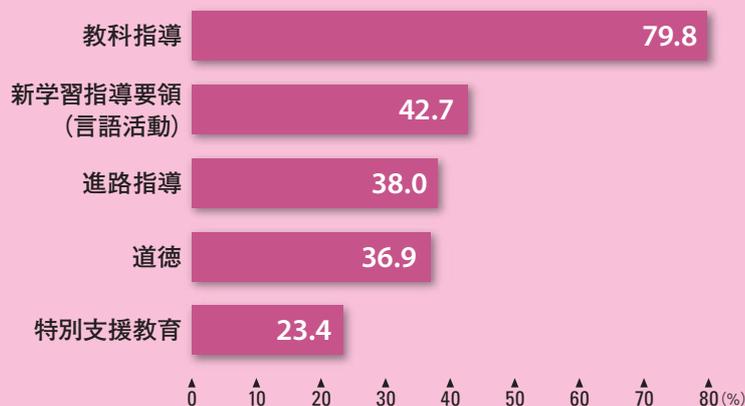
今号では、教科指導の中での言語活動を通じて、

いかに生徒の力を高めていけばよいのか、

識者のインタビューと学校事例から考えていく。

言語活動が教科指導に次いで校内研修のテーマに

Q. 今年度、どのような領域について校内研修を行いますか
(予定も含む)



*上位5項目を掲載

出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書 2013」

調査期間は2013年4~7月。調査対象は全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,475人

言語活動への課題と期待

学習指導要領には「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」「主体的に学習に取り組む態度の育成」に当たり、生徒の言語活動を充実することが明記されている。現行教育課程2年間の中間総括として、各校における言語活動の現状と課題をデータから探る。

図1 言語活動が充実すると思う学校は8割

Q. 新学習指導要領の実施によって、言語活動がどれくらい充実すると思いますか

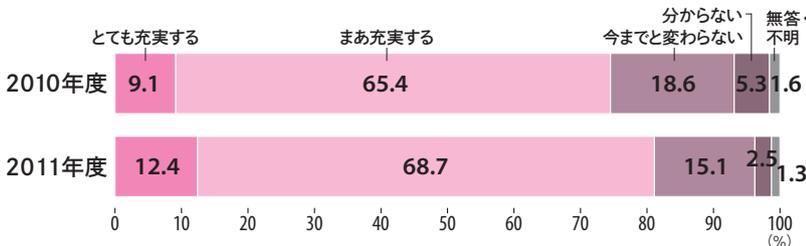
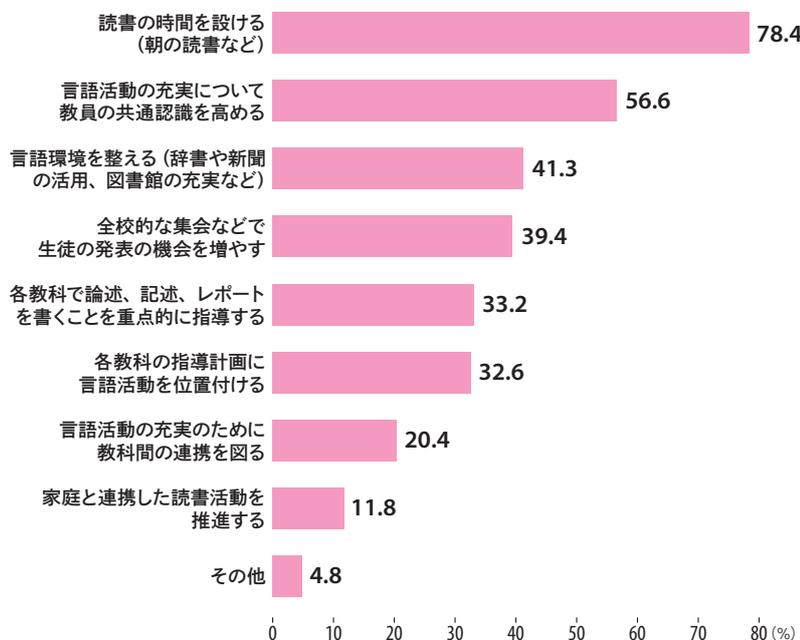


図2 約6割の学校が「教員間の共通認識を深める」と回答

Q. 今年度(2010年度のこと)、言語活動の充実のために全校的な取り組みとして行うことがありますか *複数回答



学校現場は、言語活動をどの程度意識して行っているのだろうか。現行教育課程の全面实施を控えた2010年度から2年間で、「新学習指導要領の実施によって、言語活動がどれくらい充実すると思うか」と尋ねたところ、「とても+まあ」充実する」で約7ポイント増加した(図1)。また、言語活動の充実に向けて全校で行う取り組みは、「読書の時間を設ける」が約8割と最も多く、続いて、「言語活動の充実について教員間の共通認識を高める」となる(図2)。一方で、「各教科の指導計画に言語活動を位置付ける」(32・6%)、「言語活動の充実のために教科間の連携を図る」(20・4%)は相対的に低く、教科指導における言語活動が、あまり十分でない様子もみかえる。

全面実施後に教育活動に変化はあったのだろうか。12年度の取り組みは、約半数が「言語活動の充実に資する全校的な取り組み」を「増やす予定」と回答した(図3)。実際、13年度に言語活動は、「十分である」「まあ十分である」と約6割が肯定的に回答している(図4)。ただし、「教材研究・授業研究不足」「指導ノウハウ不足」「時間不足」「教科間連携不足」「取り組みへのばらつき」を課題に挙げる学校は多い(図5)。

現行教育課程3年目となる14年度、言語活動を一層充実させるためのポイントを研究者のインタビューと3校の事例から考えたい。

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

図4 約6割の学校が言語活動が「十分だ」と回答

Q. 学校全体としての言語活動の取り組みは十分だと思いますか

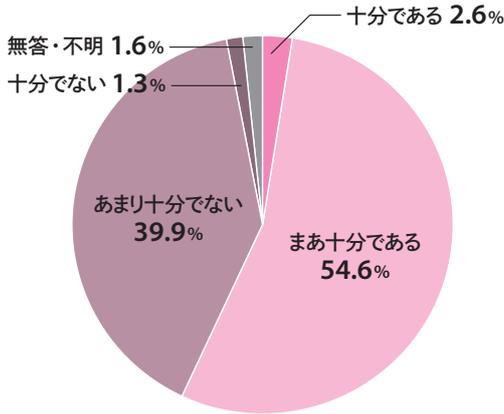
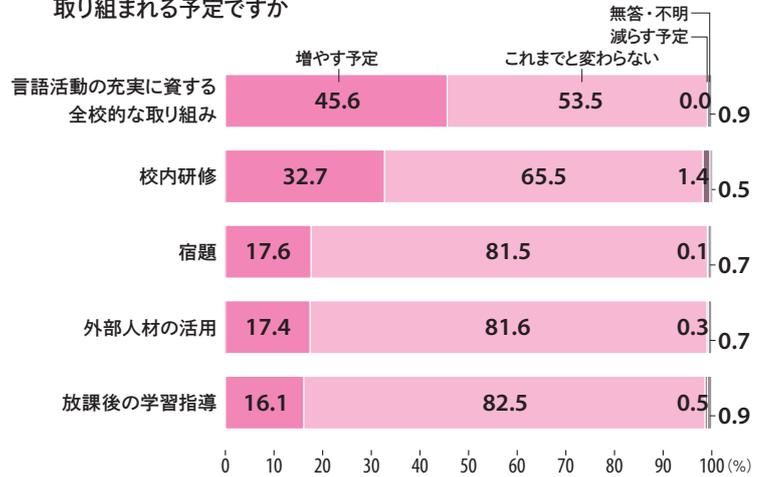


図3 半数の学校が「言語活動に力を入れる」と回答

Q. 貴校では今年度(2012年度のこと)、次のことにどのように取り組まれる予定ですか



注) これまで実施しておらず、今年度も実施する予定がない場合は「これまでと変わらない」に含まれる

図5 言語活動を行う時間の不足が大きな課題

Q. 貴校での言語活動の取り組みに関して、次のようなことが課題になっていますか

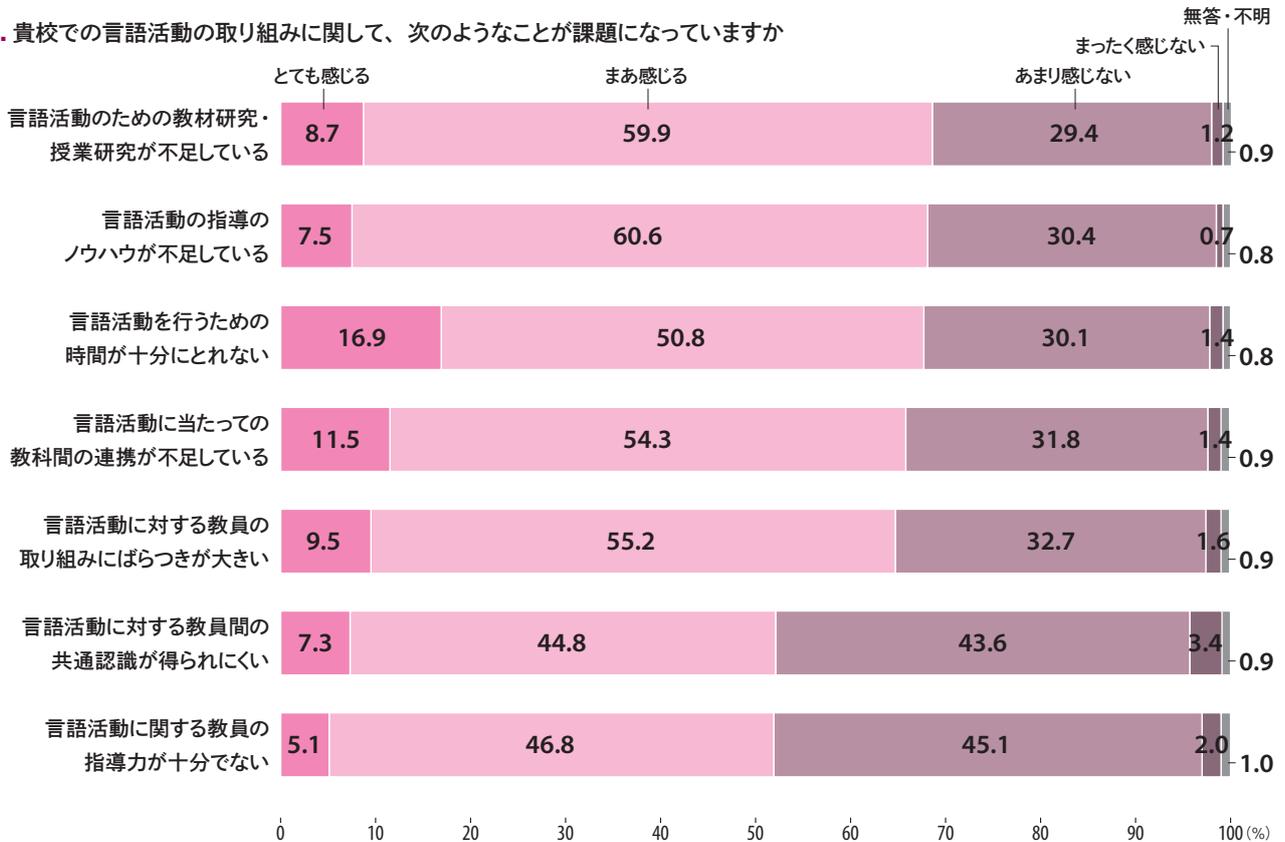


図1出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」(調査時期は2011年6~7月。調査対象は全国の中学校の主幹教諭・教務主任2,839人)
 図2出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2010」(調査時期は2010年4~7月。調査対象は全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,366人)
 図3出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2012」(調査時期は2012年4~7月。調査対象は全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,483人)
 図4、5出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2013」(調査時期は2013年4~7月。調査対象は全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,475人)

生徒の考える力を伸ばし、学習意欲を高める 言語活動の「7つの指針」

東京女子体育大常任理事・教授 田中洋一

言語活動の重要性は誰もが認めるところだが、活動の意義や効果的な方法は十分浸透しているのだろうか。どのような点に気を付ければ、生徒の学力向上につながる活動となるのか、活動の意義と実践の要点について、国語教育の専門家である、言語活動に詳しい東京女子体育大の田中洋一教授に聞いた。

言語活動は、教科の目標を達成するための手段

現行の学習指導要領の告示から6年が過ぎて、「言語活動」という言葉は学校現場にかなり浸透してきたと思います。ただ、各校の様子を見ると、全校一丸となって積極的に推進している学校がある一方で、依然として言語活動のねらいを理解しきれていない学校があるように感じます。

2007年に学校教育法が改正され、学力の要素が「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」であることが明示されました。

従来の日本の学校教育は、「知識・技能」においては一定の成果を上げてきました。しかし、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」や文部科学省「全国学力・学習状況調査」などの結果から、子どもの「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」に課題があることが浮き彫りとなり、それらの力を高める方策の一つとして、学習指導要領に「言語活動の充実」が示されたのです。

ここで忘れてはならないのは、言語活動はあくまでも教科目標を達成するための「手段」であることです。例えば、「コミュニケーション能力の向上」を全教科の言語活動の柱にしている学校があります。それ自体はよいと思いますが、学習指導要領の趣旨と照らし合わせ

てみると、重点の置き方に偏りがあるといわざるを得ません。言語活動を取り入れた授業を設定することによって、それまで伸ばし切れていなかった生徒の思考力・判断力・表現力や学習意欲を高める———それが、言語活動の本来のねらいだからです。

言語活動を授業改善の中心にすることで、校内研修がより深まります。中学校は教科担任制で、教科を超えて校内研究を行うのが難しいといわれてきました。しかし、言語活動は全教科に共通することであり、学校全体で取り組むことが出来ます。言語活動を横軸とした教科横断型の研究が可能になるのです。

例えば、数学の授業としての評価は、数学の教科担当以外の人にはやりにくいものです。

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として



たなか・よういち◎横浜国立大大学院修了。専門は国語教育。東京都公立中学校教諭、東京都教育委員会指導主事・指導室長等を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、国立教育政策研究所全国教育課程実施状況調査結果分析委員会副主査、同研究所評価規準・評価方法の工夫改善に関する調査協力者会議主査などを歴任。学習指導要領中学校国語作成協力者。主著（編著）に『中学校国語科新学習指導要領詳解ハンドブック』『国語力を高める言語活動の新展開 全4巻』（いずれも東洋館出版社）など。

が、授業で行った言語活動が、生徒の考えを深めるのに適切なものだったのか、考えるための資料や時間は十分にあったのかという視点であれば、教員全員で議論できます。また、前月に行った体育の授業では生徒への事前の情報提供が足りなかったので、翌月の社会の授業ではそこを工夫しようというように、学校全体で研究の連続性が生まれ、段階的に研究を深めていくことも出来ます。

全校体制で言語活動に取り組む学校から、「教科の横のつながりが密になり、風通しのよい風土が醸成された」とよく聞きます。まずは管理職やミドルリーダーの先生が、言語活動を行う目的や、学校が目指す方向性を明確に示すことが重要です。

では、言語活動の質を高めるためには、どのような点に留意すればよいのでしょうか。私が考える7つの指針を紹介します。

1 言語活動を行う場面の設定

どの教科にもいえることですが、どの単元の、どこで言語活動を行うかによって、取り組みの深さは変わります。生徒同士で交流したり、ワークシートに自分の考えを書いたりするためには、前提となる基礎的な知識が必要で、それらを教えた上で活動を行うのか、それとも、まず考えさせてから知識を教えるのか。単元の特性や課題の内容に応じて、効果的な場面を考える必要があります。

2 発問の工夫 生徒が深く考える発問にする

発問は、生徒から出来るだけ多様な意見が出やすいもの、正解に幅があるものにする活動が深まります。

ある中学校の社会科の先生は、生徒に「豊臣秀吉と徳川家康のどちらが庶民に人気があったのか」と投げ掛け、話し合いをさせました。普通なら「秀吉と家康はそれぞれ何をしたのか」と聞くところですが、それでは教科書や資料を読めば答えがすぐに出てしまいます。「どちらが人気があったのか」と問えば、2人の業績を調べるだけでなく、業績を意味付けしたり、中世から近世への時代の流れを俯瞰したりすることが必要になります。単に知識を身に付けるだけでなく、思考と判断を伴った活動となるのです。

数学でも、計算の結果だけを答えさせると、○か×かだけですが、解の求め方に着目すれば複数のアプローチが可能になります。生徒は自分なりのやり方を考えられます。

このように、結論に幅がある発問を工夫することが、結果的に生徒が自分の頭で深く考えることにつながっていきます。

3 情報の量と質の調整

思考の前提となる情報をどう与えるか

1 言語活動を行う場面の設定とも関連しま

*プロフィールは2014年3月時点のものです

すが、言語活動を行う際、生徒にどの程度の情報を与えるかも重要です。根拠に基づいて考えさせるためには、それに必要な情報を過不足なく伝えるべきでしょう。生徒の様子を見て、議論が滞っているようであれば、「江戸時代の記録にはこんな農民の様子が記されているよ」というように追加の資料を与え、一歩踏み込んで考えさせるような支援が必要です。必ずしも、教科書の情報だけに限る必要はありません。

一方で、理科の実験について、教科書に必要なことが全て書かれている場合には、単元に入る前に生徒に実験の手順を考えさせ、一通り意見が出た後に教科書を見ながら解説するという方法も考えられます。生徒からどのような意見が出るのかを想定して、情報の量と質を調整することが重要です。

4 考える時間の確保

一人で考える時間が活動を深める

言語活動では、生徒が課題について考え、自分なりの意見を持つことそのものが大切です。ただし、頭の中だけで考えていたのでは、周りは支援も評価も出来ないのです。書かせたり発表させたりする必要があります。ディスカッションやレポートなどの活動は、あくまでも考えたことを深めるための手段だということをお忘れではありません。

それらの活動を行う時は、生徒が一人で考

える時間を十分に確保する必要があります。学習が苦手な生徒や考えるのに時間が掛かる生徒でも十分考えられるだけの時間がなければ、学力が上位の生徒や反応が速い生徒ばかりが他の生徒を引っ張っていくことになりかねません。その状態が続けば、学習が苦手な生徒は考えること自体を放棄してしまうかもしれません。

限られた授業時間の中で教えるべきことがたくさんあるので、言語活動をする余裕がないという先生もいるでしょう。確かに教科によつては、どの単元でも言語活動をしようとする時間が足りないかもしれません。実技教科などでは、ここぞという時だけでもよいのです。ただし、行う時は考える時間をたっぷり与える。教室が静まり返っても、それは生徒が頭を働かせている時間ですから、教師は待つことが大切です。

5 言語活動の評価の留意点

方向性の評価も行う

言語活動の大切な評価規準は、生徒が自分なりの考えを持てたかどうかということですが、問題への答えが間違っている場合、それは「知識・技能」の観点では減点であっても、言語活動で評価する「思考・判断・表現」の観点では、自分の考えを持てたという意味で加点の対象となり得ます。

気を付けたいのは、評価の尺度です。「知識・

理解」では生徒がどこまで理解しているかという到達度の評価を行います。「思考・判断・表現」や「関心・意欲・態度」は方向性の評価も行います。どの程度の水準に達しているかだけでなく、生徒の思考や意欲がどの方向を向いているのかを評価する必要があります。答えは間違っていないでも、与えられた情報を基に自分なりの考えを持たせたら加点するというように、評価に幅を持たせることが大切です。

また、生徒の思考は、途中経過も評価することが大切です。例えば、数学の証明問題で、「3段目まで出来たが、4段目に移項する時に間違えた」という生徒と、「全く最初から考えられない」生徒では、思考と判断に大きな差があります。思考の過程に対してきちんと評価・承認を与えることで、生徒は、正答への距離や誤答の質が分かり、次の活動への意欲が湧いてくるのです。

6 生徒への個別支援

生徒を丁寧に見て個別に支援

言語活動では、学力上位層の生徒が力を伸ばしやすい面がある一方、基礎知識が定着しておらず、調べ方や考え方が分からない生徒には、個別の支援が必要になります。

一人では考えられない、自分の意見を持っていないという生徒には、生徒が考えたり書いたりしている時に机間指導を行い、「資料集の〇ページを見てごらん」等のアドバイスをす

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

るのもよいでしょう。一方、考えられている生徒には、更に考えを深められるように追加の資料を提示するなど、個別に対応していくのです。先生は授業中の生徒の様子をきめ細かく観察し、学力レベルに応じた支援を行う必要があります。

7 雰囲気づくり

日頃から自由に話せる雰囲気をつくる

生徒が自分の考えを自由に表現できるように、日頃から授業の雰囲気づくりをしておくことも、言語活動の成否を左右します。

先生方は、普段の授業で自分が用意した正解が出てくるまで、生徒を指名し続けてはいないでしょうか。そればかりになると、生徒は「正解が出ないと先生は嫌がる」「正答に行き着かなければ考えても無駄だ」と思い、思考自体をやめてしまいかねません。

普段の授業から、**②発問の工夫**で述べたように、多様な意見が出やすい発問をし、正解が出てこなかったとしても、「よい視点だったね」「でも、結論がまだあいまいだから、友だちに聞いてみよう」というように、考えたことをきちんと評価し、誤答を生かしながら授業を進めていく。正答のみを受け入れ、誤答を拒絶するのではなく、その子なりに根拠を持って考えた意見を大切にすると、根拠をつくる必要があります。そうした指導の積み重ねが、「自分で考えることに意味がある」

というメッセージにつながるのです。

言語活動の意義を保護者に伝えることも学校の使命

言語活動は、思考力・判断力・表現力を伸ばすことに適している一方で、活動自体に時間が掛かるため、高校入試を強く意識している保護者の中には、知識を教え込む授業の方が分かりやすく、試験の得点に直結する良い指導だと考えている方もいます。全校で言語活動を推進するためには、保護者の理解を得ることも大切なポイントになるでしょう。

保護者に言語活動の意義をしっかりと伝え、家庭でも子どもと語り合う習慣を付けてほしいというメッセージを、学校から積極的に発信していくべきです。例えば、テレビのニュースを見ながら、経済の問題について話し合ってみる。ニュースの内容を正確に理解できなくても、目の前のことに興味関心を持ち、自分なりの意見を持つようになるれば、学力的にも伸びるということが保護者に理解してもらうことが重要です。また、高校入試でも、考える力を問う問題が増えていきます。考える力こそ社会で求められている力であるという認識が、定着してきているのです。そのことを伝えれば、保護者にも言語活動の重

要性がより理解しやすくなるでしょう。管理職が中心となり、そうしたメッセージを発信していくことも、今後ますます重要になると考えます。

何より大切なのは、生徒が「人生80年時代」を生きていくために身に付けておくべき力は何かを先生一人ひとりが考え、どのような指導が必要かを模索し続けていくことです。先進校の取り組みに学び、自分の教科で何が出るのかを考え、言語活動を実践してみてはいかがでしょうか。先生自身が、言語活動によって生徒の思考が深まるという経験をすれば、授業の質の向上に向けた大きな一歩になるはずです。

効果的な言語活動を実践するためのポイント

- 1 言語活動を行う場面の設定** 言語活動が効果的に行える場面を設定する
- 2 発問の工夫** 思考を深められる発問にする
- 3 情報の量と質の調整** 思考の前提となる情報をどう与えれば活動が深まるかを考慮する
- 4 考える時間の確保** 学習が苦手な生徒でも十分考えられるだけの時間を確保する
- 5 言語活動の評価の留意点** 考えた内容だけでなく、考えが持てたかという観点でも評価する
- 6 生徒への個別支援** 活動中は生徒の様子を丁寧に観察し、個々に適した指導をする
- 7 雰囲気づくり** 普段から自由に表現できる雰囲気を授業の中につくっておくことで、言語活動も活発になる

「根拠」に基づき、論理的に 考え、表現する力を養う

東京都立川市立立川第二中学校

立川市立立川第二中学校では、「根拠」に基づき考えを述べさせる発問や、ルーブリックを用いた評価など、さまざまな工夫をしながら、教科横断で言語活動に取り組んでいる。その結果、自分の考えを持つ生徒、相手を意識して話せる生徒が増えただけでなく、教師の意識も大きく変わった。

課題意識

自分の考えを 自信を持って伝える力に課題

立川市立立川第二中学校が、立川市の指定を受けて言語活動に取り組み始めたのは2010年度のこと。「思考力・判断力・表現力等を育む授業改善」をテーマに全校体制で授業改善に着手した。その内容は、赴任したばかりの常盤隆校長にとって、必ずしも満足できる内容ではなかった。授業改善の中心は話し合い活動を中心にした内容が多く、生徒が考えを深めていく工夫が足りなかった

と、常盤校長は振り返る。

「言語活動と話し合い活動はイコールではないことを、先生方に理解してもらったところから始めなければならぬと感じました」

翌11年度、東京都「言語能力向上推進校」に指定されたのを機に、クリティカル・リーディング、クリティカル・シンキング（図1）の考えを取り入れた言語活動を研究の中心に据えた。授業中に考える場面、表現して伝える場面を設定することで、分析的・論理的思考力を育み、物事や情報をうのみにせず、自分で考える力を身に付けるのがねらいだ。常盤校長がクリティカル・リーディング、

School Data

◎1947（昭和22）年開校。地域との結び付きが強く、地域と連携した「あいさつ運動」「高尾山ナイトハイク」は伝統的な活動。2011～13年度東京都教育委員会言語能力向上推進校。13年度東京都教育委員会スポーツ教育推進校。



校長◎常盤 隆先生

生徒数◎488人 学級数◎15学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒190-0012 東京都立川市曙町3-29-46

TEL◎042-523-4338

URL◎<http://www1.m-net.ne.jp/dai2/>

公開研究会◎未定

図1 クリティカル・リーディング&シンキング



*同校の資料を基に編集部で作成

クリティカル・シンキングを活動の柱に据えたのは、生徒の気質への課題意識があった。「生徒は優しくて穏やかな半面、自信を持って自分を表現する積極性が欠けていました。」

*プロフィールは2014年3月時点のものです

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

彼らに自信を付けさせ、意見交換が出来るようになれば、学校全体にもっと活気が生まれるのではないかと期待しました」（常盤校長）

一方、現場の教師が最も課題に感じていたのは、学びに向かう姿勢だった。研究主任の菅真代先生は次のように話す。

「授業中に、生徒からよく『テストに出ますか』と聞かれます。成績に関係することには一生懸命ですが、それ以外のところで目標を持って挑戦する熱意が弱く、自分の考えを述べたり表現したりしない生徒が少なくありませんでした」

●言語活動での留意点

根拠を示し 論理的に表現する力を付ける

指導において最も重視するのが、「根拠」を示しながら論理的に表現する力を付けること。「根拠」は、生徒がそれまでに学んだ「既習事項」を指す。自分が持っている知識や経験を総動員して課題を追究することによって、思考力・判断力・表現力を高めると共に、知識・理解の定着を図ろうとしている。

例えば、国語の授業で学んだ倒置法や擬人法などの表現技法を用いた俳句鑑賞もその1つだ。「私はこの部分が心に残りました。その理由は、○○の表現技法が使われ、それによって○○の効果が生まれているからです」というように、既習事項を活用し、それを根

拠に示しながら結論と結び付けられるように指導する。国語科の棚田優子先生は、「以前に習った内容を思い出せるような発問を心掛けています」と話す。

社会科での言語活動は、資料やデータの読み取りが中心だ。生徒は教科書の中から答えを探そうとしがちだが、教科書に書いてあることだけでは説明しきれないことを、幅広い資料やデータを活用させながら体感させる。

また、社会科では、ワークシートを活用して、授業中の生徒の思考の方向性を見取ることも大切にしている。社会科の江坂正人先生は、次のように説明する。

「発言だけに注目すると、発表が得意な生徒の意見に固定してしまいます。人前で意見を言えない生徒も考えていないわけではなく、書くことによって意見表明できます。そういう生徒の思考の深まりや方向性を把握するためにも、ワークシートに書かせて意見をすくい上げるように心掛けています」

●言語活動の評価方法

独自の「二中基準」で 思考・判断・表現を評価

「思考・判断・表現」の評価は、独自の「二中基準」という3段階のルーブリックで行う。ステップ1「自分なりの考えを持って表現する」、ステップ2「根拠（理由）を示して自分なりの考えを表現する」、ステップ3「自



立川市立立川第二中学校校長
常盤 隆 ときわ・たかし
「生徒が自信を持って自分の考えを表現でき、相互交流できるような教育を進めたい」



立川市立立川第二中学校
主任教諭。国語科担当。「先生になりたいな」と生徒たちが思うような姿を見せたい」



立川市立立川第二中学校
主任教諭。国語科担当。「感動的な中学校生活を演出できる教師でありたい」



立川市立立川第二中学校
主任教諭。研究主任。英語科担当。「生徒に求める分、自分も自分のことを語れる人間でありたい」



立川市立立川第二中学校
国語科担当。「何事も、本気で、真剣に取り組むと楽しくなる」。この思いを伝えられる教育をしていきたい」

分の考えを修正し論理的に表現する」。これを基に、各単元や授業に応じた評価基準を作成する（P.12図2）。例えば、「根拠はあるけれども、結論がずれている」という場合は、「知識・理解」の観点ではマイナスイタだが、「思考・判断・表現」の観点では評価の対象となる。生徒にも分かりやすい評価であり、そうでなければ意味がないと考えている。「ステップ3の『論理的に』というのが一

図2 「二中基準」国語科、家庭科の例

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
3年生国語科	社説で述べられている主張に対して自分の考えを持っている。	社説で述べられている主張について、根拠(理由)を挙げた上で賛成、反対などの意見を発表する。	社説で述べられている主張に対して、他の発表する意見を聞いて、自分の意見を修正したり深めたりして発表する。
2年生家庭科	献立を立てる時に必要な条件を自分なりのことばや文章で表現している。	各自の考えたことを伝え合い、班員で協力して1つの献立を考えている。	他の班の発表を聞き、自分なりの考えを入れながら、自分の考えを見直し修正を加えていき、考えや工夫を深めていく。

*同校の資料を基に編集部で作成

番難しいところ。根拠は妥当でも結論が飛躍していることも多く、ここは今後の指導上の課題でもあります」(常盤校長)

定期考査に記述問題を盛り込む教科も多い。国語では、「走れメロス」の単元で、メロスが山賊に襲われるシーンについて「山賊は王様が仕組んだものか、偶然出てきたのか、あなたなりの根拠を挙げて述べなさい」という設問を入れた。答えはどちらでも構わない。自分なりに文中の描写や価値観を根拠にして解答していれば加点される。

「200字程度の記述問題を出すと、以前は諦めて何も書かない生徒が大勢いましたが、この問題では無回答の生徒はほとんどいませんでした。既習事項を根拠として自分なりの

考えを持つ授業を通して、思考から逃げない姿勢が身に付いたのでしよう」(棚田先生)

●言語活動が活性化する風土づくり

「ビブリオバトル」で互いを認め合う雰囲気をつくる

言語活動の質を高めるには、人の話を聞く力や生徒同士が認め合う雰囲気づくりが重要となる。こうした学級づくりにつながる取り組みの1つが、13年度に始めた「ビブリオバトル」(*)だ。自分の薦めたい本を5分間でプレゼンテーションし、2分間の質問タイムの後、最も読みたい本を参加者が投票し、「チャンプ本」を決める。

この活動で同校の教師が最も重視したのが、聞き手が発表者に「質の高い質問」をすることだ。以前、2年生で「私の宝物」というテーマでスピーチを行った時、その後の質問では「宝物の値段はいくらですか?」「どこで売っていますか?」という浅薄で表面的な質問しかされなかったことがあった。国語科の大澤友紀先生は、その活動をこう振り返る。

「なぜそれがあなたにとって宝物なのか」を聞いてほしかったのですが、生徒は質問することを意識して話を聞いていないために、断片的なキーワードしか頭に残っていませんでした。質問をするための訓練が必要だとは思いませんでした」

大澤先生は、ビブリオバトルを行う際には、

プレゼンテーションで気になったことはメモして、質問の材料にするよう生徒に指導した。「気になることは人それぞれ違うから、正解はありません。自分が思うことをメモしてください」と伝えたところ、的を射た質問が出る生徒が増えていったという。

ビブリオバトルの公開授業では、教師が驚くほど生徒はよく質問した。

「質問はありますか」と聞くと静まり返ってしまうのが、本校のいつもの光景でした。それが、ビブリオバトルの時は何人も手を挙げて、本の内容に深く切り込んで質問をする姿に驚きました」(菅先生)

「チャンプ本」を決める投票は、本に対する熱い思いを語れているかを基準に行った。「私たちは雄弁な生徒を育てたいわけではありません。本番では、つたなくても一生懸命に、自分がどれだけこの本が好きかを伝えられた生徒が紹介した本に票が集まりました。主張に説得力があるかどうかというところを重視して選んでくれたのはうれしかったです」と、大澤先生は頬を緩める。

●研究授業の進め方の工夫

「生徒の動き」に着目し教科を超えて授業を見合う

研究授業は教科横断で行う。そこで、授業を見るポイントとして「生徒の動きを見ること」を挙げている。

*立命館大の谷口忠大准教授が考案したゲーム形式の書評合戦のこと。詳しくは右記ウェブサイト参照。http://www.bibliobattle.jp

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

図3 研究授業の付せんの活用例

黄色の付せんは対象生徒のつぶやきや行動を記録する。

13:22 A 思考ボードを開き、真剣に取り組み、他の生徒と細かいところまで確認していた	13:22 B しばらく何もなかった。友達の声かけにより、やっと思考ボードを開き、確認を始めた	13:22 C 落ち着かない様子。「分からない」とつぶやきながらしばらく何も記入できなかった。机間指導中の先生に助けを求めた
---	--	---

青色付せんは対象生徒の思考・判断・表現を記録する。

13:22 D 手をあげて発言した。先生の問いかけに適切な説明ができた。思考ボードは見ないで自分の言葉で表現できた	13:22 E 指名されて発言した。思考ボードを見ながらではあるが、しっかりと説明ができた	13:22 F 思考ボードを開き、電圧計の使い方について気付いたことを新たに書き加えていた
--	--	--

赤色付せんは生徒全体の行動について記録する。

13:22 ほとんどの生徒が思考ボードを開いて確認した。最初に何もなかった生徒は4名。積極的に意見交換して確認している生徒が6名	13:22 先生の問いかけにほとんどの生徒が手をあげた。3名の生徒が発言した。他の生徒は3名の発言をしっかりと聞いていた	13:22 すぐに活動に移れない生徒が半分以上いた。先生の厳しい指導により、思考ボードを全員が開くまでに3分ほどかかった
---	---	---

2011年度の研究授業(理科)では、教室全体を見る教師と、特徴の異なる6人の生徒の動きを追う教師に分かれて、授業を見取った。3色の付せんを使い、黄色には生徒のつぶやきや行動、青色には生徒の思考・判断・表現の変化が見られた行動、赤色には生徒全体の行動を記録した
*同校の資料を基に編集部で作成

ている。13年度の生徒意識調査によると、「意見を言うとき、その根拠や理由を明確にして話すようにしている」という生徒は、11年度の56%から75%（できている+まあできている）に増加。授業で記録する習慣が身に付いた生徒、相手を意識した

「当たり前障りのない感想を述べ合う研究授業・研究協議会では、行く意味がありません。あくまで生徒を中心に据えて、教科を超えて先生方が活発に意見を交換できる研究授業・研究協議会となるように工夫しています」(常盤校長)

参観側の教師は、「この発問で生徒がこのように動いていた」「誰々は指示が分からず固まっていた」など生徒の活動を観察する。「先生に視線が集まりにくいので、授業をする方も緊張せずに済みますし、生徒の動きに対しての意見なので、他教科でも抵抗なく発言できます。このスタイルを取り入れてから、研究授業が活発になりました」(江坂先生)

研究授業の方法は、生徒のグループごとに担当教師を決めて観察する方法と、異なるタイプの生徒を数人取り上げて、授業内における変容を見る方法がある。前者は、学級全体

がどのように動いていたのか、各グループで生徒がどのように活動していたのかを見るのに適している。生徒の思考の深まりを個別に見る場合は、後者となる。活発に発言するタイプ、静かに考えるタイプなど、特徴の異なる生徒を数人指定し、その生徒の動きや発言、表情、ノートの記事内容を付せんに記録し、事後研究ではそれらを基に話す(図3)。「自分の指示や発問によって生徒がどのように動いたのかは、授業をした自分自身も知りたいところ。指示の仕方が悪かった、発問があいまいだったなど、生徒の動きから知ることが出来るのは貴重な体験です」(棚田先生)

●成果と課題

日常の場での生徒同士の意見交換が今後の課題

授業改善の成果は生徒の変容となって表れている。13年度の生徒意識調査によると、「意見を言うとき、その根拠や理由を明確にして話すようにしている」という生徒は、11年度の56%から75%（できている+まあできている）に増加。授業で記録する習慣が身に付いた生徒、相手を意識した

聞き方や話し方が出来る生徒も増えている。何よりも大きな成果は、教師の意識改革がなされたことだ。

「私たちの世代は、なかなか自分の授業スタイルを崩せません。うまくいかない力不足を省みず、つい生徒のせいにしてしまいます。学校を挙げて新しい取り組みを進める中で、若手の先生方の工夫を目の当たりにし、ベテランの先生方も積極的に授業を変えてみようと考えようになったのは大きな変化です。教師の意識を変えるこそが、研究の最大の目的であることを改めて感じました」(江坂先生)

「研究授業は私も生徒も緊張しますが、年に最低1回はそういう場に身を置いて、自分にプレッシャーをかけながら新しいことに挑戦していきたい。そういう姿勢を持ち続けることで、教師もより良いものを目指して頑張っていることが、生徒にも伝わるのだと思います」(棚田先生)

今後の課題は、話し合いや討論などの学習活動を更に充実させることだ。

「ここ数年で、生徒は自分の意見を自信を持って言えるようになりました。その力を活用して、生徒同士でもっと意見交換や交流が出来るようになってほしいと考えています。公開授業などの特別な場だけではなく、日常の授業でも出来るようになれば、本校は更に活性化していくはず」(常盤校長)

教材の分析から「型」を取り出し、 考えを整理させ見通しのある活動に

広島県 福山市立向丘中学校

福山市立向丘中学校は県の指定を受け「思考力・判断力・表現力の育成」の研究に取り組む。生徒と共に教材から「思考の型」「表現の型」を取り出し、その型を習得して日常的な場面に活用したり個性的に表現したりする授業を展開。他教科との連携授業も行い、生徒の考える力、主体的に学ぶ意欲を引き出す。

◎課題意識

**学力向上への教師の意識を高め、
意欲的に学ぶ生徒を育てたい**

福山市立向丘中学校は、福山市郊外の閑静な住宅街にある中規模校だ。2013年度の広島県「『基礎・基本』定着状況調査」や文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、いずれも県・全国平均を上回る成績を挙げ、市内では落ち着いた雰囲気のある学校として知られる。09年度、同校は「広島県中学校学力向上対策事業」に名乗りを挙げ、3年間の指定を受けて「思考力・判断力・表現力の育成」

の研究に取り組んできた。その背景を、三島重義校長はこう語る。

「生徒はとても素直なのですが、自信を持って前に出ていく積極性、自分から意欲的に学びに向かう主体性に物足りなさを感じていました。県の事業をきっかけとして、教師の意識を学力向上に向け、生徒の学習意欲の向上を図りたいと考えました」

◎研究の進め方の工夫

**教科混合のグループで
授業を見合い、意見を交わす**

研究は、誤答分析↓授業改善のポイントの

School Data

◎1962（昭和37）年、福山市立水呑中学校と高島中学校が統合して創立。校訓は「明るく 正しく たくましく」。「思考力・判断力・表現力の育成」「規律3要素（挨拶・時間・掃除）の徹底」「部活動の充実」に重点を置く。



校長◎三島重義先生

生徒数◎ 377人 学級数◎ 14学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒720-0833 広島県福山市水呑向丘 107

TEL◎ 084-956-0074

URL◎ <http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/chu-mukaigaoka/>

公開研究会◎ 2014年6月26日（予定）

明確化↓授業研究↓研究協議↓改善策の共有化・評価問題での授業の検証という流れで行った。初年度は、国語・数学・英語で取り組んだが、全教科で研究しなければ学校全体の取り組みにならないという門田剛年前校長の方針により、全教師が研究にかかわった。3教科でそれぞれグループをつくり、国語には理科と保健体育、数学には技術・家庭と社会、英語には音楽と美術が加わり、それぞれの視点から意見を述べた。翌年、理科と社会を加えた5教科、そして最終年度の11年度には全教科へと研究を広げた。

文系・理系・実技系が混在するグループと

*プロフィールは2014年3月時点のもので

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

した理由を、研究主任の飛田美智子先生はこう語る。

「黒板の書き方や発問の仕方、授業の流れ、ワークシートなど、教科は違っても参考になる点はたくさんあります。初年度から他教科も加わったことで、3教科の頑張りを見て、自分たちも頑張ろうという気持ちを持ってたと思います。今は、教師間に教科を超えて意見を言い合う雰囲気根付き、若手教師も前に出て発表する光景が当たり前になりました」

また、公開授業時には必ず外部講師を招き、取り組みの評価を受けている。

「専門的な見地から改善点を指摘してもらい、褒めてもらうことで、先生方に『大変だったけどやって良かった』と効果を感じられるようにしています」(三島校長)

生徒の課題を起点にして 授業内容を組み立てる

研究の最大の特徴は、生徒のつまずきを把握し、原因を明確にして改善点を考え、授業を組み立てていく点だ。

広島県の公立小・中学校には、県内共通の学習指導案の様式がある。一般的な学習指導案と異なり、最初に「つまずきの把握」という項目が設定されている。全国や県の学力調査、定期考査など、音楽や体育などの実技教科では生徒に行ったアンケートなどを基に、生徒がどこでつまずいているのかを明確にする。ここで把握した課題を解決するために「指導改善ポイントの明確化」をした上で「単元の目標」「単元の評価規準」「指導と評価の計画等」などを設定する(図1)。生徒の課題に基づき、授業でどういう力を付けようとしているのかを明示するために、この様式が考案された。

図1 1年生国語「つながりを読む」学習指導案(抜粋)

第1学年国語科学習指導案
福山市立向丘中学校 授業者：飛田 美智子

1 日時 2013年(平成25年)7月10日(水) 6校時
2 学年・組 1年2組(34名)
3 単元名 つながりを読む (教科名「にじの見える緑」「星の花が降るころ」)

【1】 つまずきの把握

「出題の趣旨」
「学習指導要領の内容・領域」
「学習指導要領の目標」
「学習指導要領の学習のねらい」
「学習指導要領の学習の到達目標」
「学習指導要領の学習の到達目標」

解答型	1◎	2△	3△	4	5	6	9	解答率
本校の割合(%)	47.7	10.0	3.1	7.7	0.8	1.5	27.7	1.5

この問題を解くために必要な力
・心情や情景を表す語句について読み取る力
・随筆の情景や登場人物の活動の意味を考える力

誤答分析

◎解答型4・5においては、みよとの気持ちの動機は記入されているが、問題文の順番にその動機があることに気づいていない。むしろ月、問題を解くこととしている。問題文と本文を照らし合わせて読むことと、主人公の気持ちが大きく変化したところを読み取る学習が必要なこととなる。

△解答型3は、文章の条件に読まない表現になっている。よく見て読むことができていない。

△解答型9は、みよとの気持ちを正確に読み取ることができていない。問題文には「みよとの気持ちを正確に読み取る」とあるが、生徒は「みよとの気持ちを正確に読み取る」という学習の目標を捉えていない。しっかりと見ることが必要であることがわかる。

学習指導案は全11項目から成る *同校の資料をそのまま掲載

一方、言語活動は「型」を重視する点に特徴がある。教材や題材、さまざまな資料から活用・表現するための方法や特徴

福山市立向丘中学校校長
三島重義 みしま・しげよし
「生徒、保護者、職員が共に夢と誇りを持ち、活動が輝く学校づくりを目指していきたい」

福山市立向丘中学校
飛田美智子 とびた・みちこ
研究主任。国語科担当。「国語の授業が、将来、人生を豊かにするきっかけになればうれしい」

福山市立向丘中学校
水野直喜 みずの・なおき
美術科担当。「モットーは『至誠』。誠実にコツコツとつくり続けることを大切にしている」

福山市立向丘中学校
前田友香 まえだ・ゆか
家庭科担当。「生徒を、感謝の心を伝えられる人に育てたい」

を、教師が示し、あるいは生徒自身が考え、それを自分たちの活動に生かしていく。学習の手順や考え方が明らかになるため、生徒は見通しを持って授業に取り組める。

同校では言語活動をどのように授業に取り入れているのか、3つの教科を例に紹介する。

●言語活動の実践例①国語科

題材から抜き出した「型」を使い、課題に取り組む

13年度に1年生で行った「作家になろう」という授業では、県の学力調査に基づいて、

心情や情景を表す語句について読み取る力、描写の効果や登場人物の言動の意味を考える力が弱いことを課題に挙げ、小説から読み取った「型」を用いて、物語を創作し、発表する活動を行った。活動の主な流れは次の通りだ。

①小説を読み、登場人物の性格や人間関係についてグループで話し合い、図にまとめる。

②心情・行動などの情報、描写や比喻表現などを取り出し、作者の表現の良さを共有し、一覧表にする(図2)。設定・発端・展開・山場・結末がどこかをグループで話し合う。

③読み取った「型」を用いて物語を創る。登場人物や場面を設定し、物語の発端・山場・結末をおおまかに考え、「段落あらすじシート」を使い、600字で下書きをする。

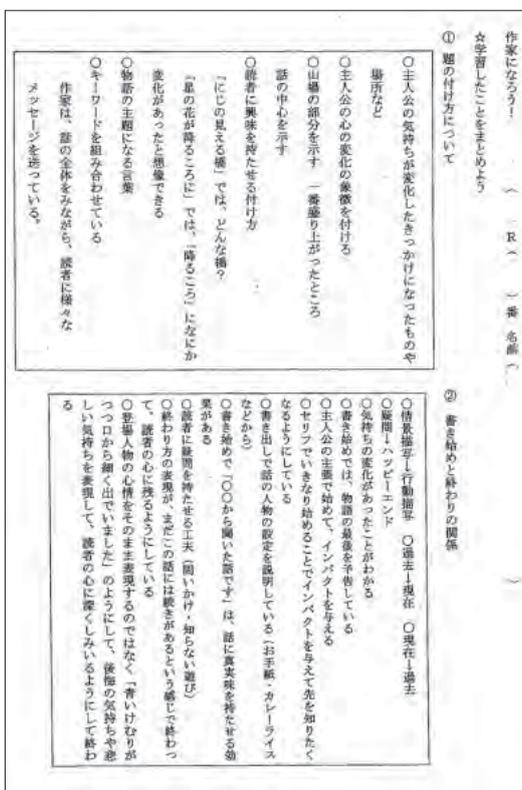
④下書きをグループで読み合い、付せんに工夫点・改善点を書いて意見交換をする。自分が活用した「型」も説明する。

活動のポイントとなるのは「型」の抽出だ。教師は「比喻表現を集めてみよう」「登場人物の性格や考え方が分かる表現を取り出してみよう」などと投げ掛け、生徒の中から「型」になる要素を引き出し、まとめていく。

「生徒が五感で感じたことを、自分の言葉にして発言させることが重要です。生徒の発言をいかに整理するか、教師の指導力が問われる点でもあります」(飛田先生)

国語科では、音楽科と共同で学級CMをつくったり、「走れメロス」を題材に「声優に

図2 生徒が小説から読み取った「型」



小説から生徒が読み取ったことを、①題の付け方について、②書き始めと終わりの関係、③描写の仕方、④きり表現の4項目に分けて一覧にし「型」とする。生徒はこれを参考にしながら、物語を創作した

* 同校の資料をそのまま掲載

なろう」という朗読活動を行ったりと、ユニークなコラボレーション授業を展開している。

「国語の基礎・基本を身に付けさせるのはもちろんですが、社会に出てからも、言葉を通して楽しみ、心豊かな生徒を育てたいと思っています。面白いと思える経験を1つでも多く積むことによって、『音楽を楽しもう』『劇を観に行こう』などと、生涯にわたって日常生活を豊かに広げていけるようになることを期待しています」(飛田先生)

●言語活動の実践例②美術科

美術での絵画鑑賞を
国語の授業で言語化する

美術科では、課題把握の際に生徒にアンケートを実施した結果、作品制作が好きな生徒が多い一方で、興味を持った技法で作品を

制作する経験が少ないことが明らかになった。

そこで取り入れたのが、マルク・シャガールの技法を使った創作活動だ。まず、マルク・シャガールの作品「日曜日」を「型」として学ぶために鑑賞した。この作品は、画家の故郷ロシアとその時滞在していたフランスの風景を描いている。「美術鑑賞シート」の「どんな建物や情景ですか」「どんな音が聞こえますか」「構成の工夫」「色使いの工夫」などの項目を理由と共に書き、作品に対する理解を深めていく。

次に、国語の授業で、生徒はシャガールの絵の鑑賞文を書いた。ここでも、「型」を意識した活動が行われ、ワークシートに「はじめ↓なか1↓なか2↓まとめ↓むすび」という鑑賞文の流れを示し、それぞれに「この絵は…(空欄)…を表していると思います」(な

言語活動を通じて高める生徒の力

—新教育課程の中間総括として

か1)、「私はこの絵から…(空欄)」(まとめ)といった「型」を示した。生徒はシャガールが作品に込めた思いを自分なりに解釈し、空欄を埋める形で鑑賞文を完成させた。

その上で、美術の授業を行い、生徒は自分の異なる3つの思い出を1つのキャンパスに描いた。普通に3つの思い出を描かせると、生徒は直近のことばかりを描くことが多いが、言語活動を通じて見方が広がり、中には、中学校の入学式と小学校の修学旅行の場面を描いた生徒もいたという。

美術科の水野直喜先生は、「美術の授業での活動を国語の授業に引き継いだことで、生徒がぼんやり感じていたことを言語化でき、鑑賞がより深まったと思います」と語る。

こうした活動を積み重ねていくと、生徒は、作品をより深く鑑賞するようになるという。

「学んだ技法を他の課題に応用する生徒もいます。こうした経験を積むことによって、社会に出た時のものの見方や感じ方も変わってくるのではないのでしょうか」(水野先生)

実技教科の授業は週1回であるため、他教科との連携によって、生徒の学習への意識を途切れさせないことにも効果があるという。

●言語活動の実践例③家庭科

教師の説明ではなく 失敗例を見せて、発見させる

家庭科の前田友香先生は、国立教育政策研

究所「特定の課題に関する調査(技術・家庭)」(*)を参考に課題を洗い出した。その調査の中で「分からないことや興味・関心をもったことについて自分から調べようとしていますか」「自分で考えたり工夫したりすることは好きですか」という質問に肯定的な回答をした生徒が少なかったことに着目した。

箸袋の製作では、まず2つの完成作品を見せた。マチがきれいに縫ってある箸袋と、ねじれている箸袋を提示し、生徒に両方の袋の糸をほどいて分解させながら、どこがおかしいのか、どうしてねじれが生じてしまったのか、その理由を考えさせた。

「生徒は、自分たちが袋を分解し、考えていくことに集中していました。教師が教えるよりも、自分で発見していく方が生徒のやる気は高まります。分かるから自分でも作りたくなるし、出来るようになれば友だちにも教えたくなる。この授業をきっかけにクラスの雰囲気が良いくなり、生徒同士が自ら進んで活動に向かう雰囲気が生まれました」(前田先生)

●成果と課題

普段の授業で「型」に基づく 授業を実践できるかが鍵

研究が進むにつれ、生徒の思考が深まり、学習意欲も増していると飛田先生はいう。

「ヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』

を扱った時には、最初に読んだ感想文で『なぜ、あの場面で(あいつ)という呼び方をしたのか不思議に思った』『情景描写の中に心理描写が入っているのがすごい』と、授業でこれから読み込ませようと考えていた部分が既に書かれていました。それまで積み重ねてきた学習が生きていることを実感し、とてもうれしかったです」

ただ文章を読み取るだけでなく、「型」をつくり、考える学習を積み重ねたからこそ、難しい作品に出合っても、学んだことを生かして読み込むことが出来たのだろう。

「知識をただ我慢して暗記するのではなく、言語活動を通じて、自分から考えたり結び付けたりしていくことによって、知識を定着させることが出来るようになります。基礎・基本の定着率の向上にもつながっていくそうです」と三島校長は分析する。

今後の課題は、研究授業で行ってきた言語活動を通常の授業に広げていくことだ。

「これからは、普段の単元計画の中で、どこまでこうした言語活動を取り入れられるかが鍵になります。取り入れてある教科が少しずつ増えてきていますが、まだ全ての教師が十分に組み立てられている状態ではありません。家庭学習ともうまく関連付けながら、先生方の取り組みを広げていくことによって、安定的に学力向上に結び付く土壌が出来ると考えています」(三島校長)

生活に即した「リアルな問い」で 言語活動を行い、定期考査で評価

佐賀県 小城市立三日月中学校

2011年度、佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受け、「リアルな問い」の開発を中心とする言語活動に取り組んできた小城市立三日月中学校。指定終了後も、全校を挙げて、評価の工夫やノウハウの継承などに取り組む。どのような課題認識の下に取り組みを深化させているのか、追跡取材した。

● 課題意識

**生徒の思考力、判断力、表現力を
どのように評価するか**

小城市立三日月中学校では、2011年度から2年間、佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受けて「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。教室の中だけで授業を完結させるのではなく、授業後もそのテーマや社会の課題について考え続ける生徒を育てることを目的とした研究だ。その内容と成果は、本誌13年度Vol.1の特集で紹介した。取り組みの柱の1つは、授業における「リ

アルな問い」の設定だ。全教科で単元の中に実社会や生活に即した問い、アカデミックな問いを用意し、言語活動を通して生徒が自ら考え自分なりの答えを模索する。また、授業で言語活動を円滑に行う雰囲気をつくるため、朝の会で「リレーションタイム」を設定。生徒がペアやグループで対話やスピーチを行い、互いを認め合う気持ちを育むことで、意見を述べやすい雰囲気にしていく。

一連の取り組みを通して、生徒の学習への意欲が高まり、生徒同士が認め合う雰囲気が生まれるなど多くの成果を得た。指定終了後の課題は、「リアルな問い」を生徒にとって

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「社会を生き抜く知恵と力を身につけた心豊かな生徒の育成」。言語活動と共に、特別支援教育にも力を入れ、2014年度からは文部科学省指定の研究事業を推進する予定。



校長◎平川富久先生

生徒数◎465人 学級数◎15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒845-0021 佐賀県小城市三日月町長神田1650

TEL◎0952-73-2016

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq11051/>

公開研究会◎未定

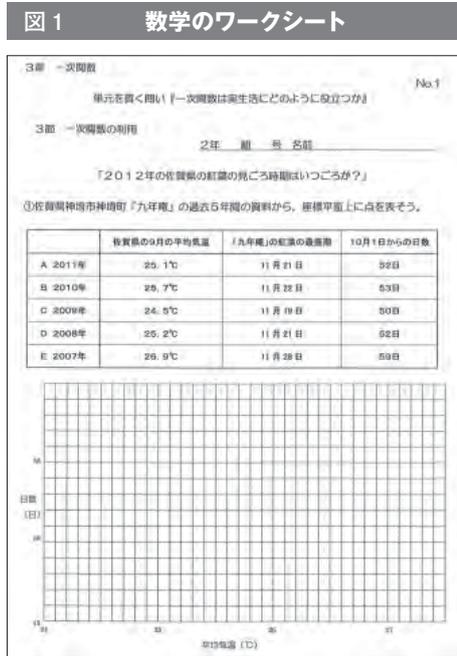
● 「リアルな問い」の設定

**一次関数を用いた紅葉の予測など
生活に根ざした課題を設定**

より意義のある内容にすること、更に生徒の思考力・判断力・表現力を測る評価方法の開発、教師が意欲的に取り組みを継続することだった。それらの課題を踏まえ、同校がどのように研究を深化させているのかを見ていく。

「リアルな問い」の設定は、引き続き同校の研究の柱だ。13年度も「聖徳太子の理想が実現したのはいつか」「最も賢い幕政改革者は誰か」（社会科）、「平方根は実生活にどの

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として



「一次関数は実生活にどのように役立つか」の課題として紅葉の見頃を予測する問いを出した。ワークシートは2枚で、1枚目は過去5年間のデータから座標平面上に点を表し、2枚目で一次関数のグラフから関数の式を求め、見頃を予測した
 *同校の資料をそのまま掲載



2年生理科の観察・実験用ワークシート。1時間の授業で何をするのかが1枚で分かり、生徒は見通しを持って授業に取り組める。また、どの点を評価するのかも明記し、生徒が何に留意してワークシートを書けばよいのかも分かるようにしている
 *同校の資料をそのまま掲載

ように役立つか」(数学科)、「100年後の自動車はどうなっているだろうか」(技術・家庭科)といった問いを授業で投げ掛けた。数学では、1年生「資料の活用」の単元で「ヒット商品を世に送り出そう」という課題に取り組んだ。4人1グループを1つの会社に見立て、新しい2種類の乾電池のどちらを商品化するか、電池の稼働時間を示す複数の資料を使って考える。生徒は授業後のアンケートで、「いろいろな考えが聞けて楽しかった」「違う意見でも互いに納得し合うことが出来た」などのコメントを寄せた。同じ課題でも人によって考え方はさまざまであることが分かり、刺激になったようだ。

2年生では、一次関数を用いて、佐賀県の紅葉の見頃を予測するグループ活動を行った(図1)。過去5年間の9月の平均気温、紅葉の最盛期のデータに基づいて計算し、「自分

たちの予測が当たるかどうか、楽しみにしよう」という原正和先生の言葉で授業を終えた。「生徒は、一次関数を使って紅葉の予測が出来ることに驚いていました。数学が将来どのように役に立つのか分からないという生徒が少なからずいるので、問いは、生活の中で数学がどのように役立っているのかを生徒が感じられる内容にしています」(原先生)

問いの自身と共に、ワークシートも進化している。理科では、ワークシートを中心に進める授業形態をとっており、授業改善もシートを中心に行っている(図2)。

研究主任の真子靖弘先生は、「理科のシートは構造化されていて、見ただけで授業の流れが把握できるようになっています。生徒にとっても書き込みやすく、見通しを持って授業に臨むことが出来ます」と話す。

また、社会科では、「集団討論を行う際に、

立論内容が資料の引用にとどまる生徒が多かったことから、討論前に記入する立論シートを工夫した。以前は結論に対する理由付けの前に引用資料を記入する形式になっていたものを、結論↓理由付け↓引用資料の順に改



小城市立三日月中学校 研究副主任。授業づくり研究部会長。数学科担当。「問題を解決しようとする意欲を引き出す授業をしていきたい」



小城市立三日月中学校 研究主任。社会科担当。「何事も創造的に考えることを、自分自身にも生徒にも求めている」



小城市立三日月中学校校長
 平川 富久 ひらかわ・とみひさ
 「生きる力」をバランスよく身に付けた生徒の育成に努めたい」

めた。更に、自分の言葉で書けていない生徒は書き直すように指導し、模範となる生徒のワークシートを電子黒板で映して共有するようになったところ、書き方が分かったためか、自分の言葉で書く生徒が増えたという。

●言語活動の評価方法

定期考査を工夫し 考える力、表現力を問う

定期考査では、思考力・判断力・表現力を問う出題をしている。

社会科では、集団討論をメインに言語活動を取り入れているが、定期考査では授業で扱っていない資料を用いて思考力や判断力を測る。1年生の学年末試験では、アメリカの銃乱射事件とコーヒーチェーン店の銃規制方針の新聞記事と、銃を持ってカフェに入店しようとする客と店員との会話文を提示し、資料を活用しながら店員がどのように客を説得したのかを考えさせた(図3)。試験前、生徒に出題形式は伝えるが、資料や設問は試験本番が初見となる。自分なりに資料をどう読み解くか、日頃の言語活動の成果が試される。採点では評価基準に柔軟性を持たせることを意識していると、真子先生は説明する。生徒が書いた解答を一通り読み、想定外の考え方や表現があれば、それを踏まえて評価基準を修正し、教科内で目線合わせをした上で採点に取り掛かる。

図3 社会科 1年生の学年末試験

6 思考・判断・表現 26点

6 太郎さんは、アメリカ合衆国について調べ学習をしている時、「2つの新聞記事」と「スターバックスの店員と客の会話文」を見つけた。新聞記事と会話文を読み、各問いに答えなさい。(3点×2＝6点)

<新聞記事1> 米コネディカット州の学校で銃乱射
アメリカ東部コネディカット州ニュータランの小学校で14日午前、銃乱射事件があり、授業中関係者によると20人の子供と2人を含め計27人が死亡した。
時事ドットコム 2012.12.15.

<新聞記事2> 米スターバックス「銃持ち込まないで」、7000店対象
アメリカ合衆国大手コーヒーチェーンのスターバックスは18日までに、店内に銃を持ち込まないよう客に要請する方針を発表した。同社の「各店は全米に約7千店。銃規制反対派からは「二度とスターバックスには行かない」といった反発も出ている。
日本経済新聞(特別通信配信) 2013.5.15.

<会話文> アメリカのあるスターバックス店での会話

店員 : お客様へお願ひです。店内に銃があると多くのお客様が不安感を持たれると思いますので、夜間からご来店される際は、ご自分の銃は自宅に置いて来て下さい。
客 : えっ! 銃をもってスターバックスに入店できないの?
店員 : いえいえ、あくまでもこれはお願ひでございまして、銃をもった方はお店に入れないということではありません。
客 : アメリカ人が銃をもつことは憲法で保障されている権利ということは知っていますよね?
店員 : アメリカ合衆国憲法 第2条 第2条
「よく規制された民兵は、自由な国の安全にとって必要であり、国民が武器を所有し携帯する権利は侵されてはならない。」 ※「民兵」とは、一般市民が兵になること
客 : a はい、もちろん知っております。ですから、あくまでも「お願ひ」であり、「禁止」ではありません。最終的にはお客様の判断におまかせ致しております。
店員 : 憲法で国民の権利として認められていることなんだから、「銃をもって入店しないでほしい」というお願ひをすること自体がおかしいとは思わないのかい? それに、b 差人を狙すのは銃を使う人間であって、銃そのものが勝手に人を殺しているのではないのですよ。
客 : A
店員 : A

1 会話文中の下線部aの店員の発言は、本筋に、アメリカ合衆国憲法第2条に違反しないのか、回答欄のあなたの考えにあてはまる方を○で囲み、そのように考える理由を書きなさい。
2 会話文中の下線部bの客の意見に対して、店員はどのようにお客を説得したと考えられますか。上の資料(新聞記事や会話文)に触れながら、Aにあてはまる店員の発言を考え、書きなさい。

1年生社会科の学年末試験で出題した例。2つの新聞記事と会話文を読み、客を説得させるための会話を答えるという内容だ
*同校の資料を一部編集して掲載

また、説明問題では、正誤だけが評価基準ではなく、第三者が見て理解できる客観的な説明になっているかをチェックする。原先生は次のように説明する。

「さまざまな解き方がある場合、きちんと説明できていれば、どのようなアプローチでも加点対象としていきます。授業では複数の解き方と、

「このような問題は採点に時間が掛かりますが、授業で集団討論をしているのに、試験では知識・理解しか問わないというのは、生徒は集団討論で学ぶ必要性を感じにくくなってしまいます。定期考査でも出題することとは重要だと考えています」(真子先生)

数学科では、思考の過程が分かる問題を最低1問は出題する。採点では、根拠を示し順序立てて書いているかを重視。社会科と同様、採点の公平性を担保するために、模範解答を用意しておき、それから外れる解答があれば随時基準を修正しながら採点を行う。

●ノウハウの共有、継承

年1回の全体研修会で 教科・学年を超えて実践を共有

教師の意識の共有、ノウハウの継承はどのように行われているのだろうか。同校では13年度に多くの教師が異動となったため、2年

言語活動を通じて高める生徒の力

—新教育課程の中間総括として

間研究に携わってきた教師と新しく赴任した教師の間で、いかにノウハウの共有や目線合わせを行うかが、大きな課題となった。

同校にはその解決策となる、学年・教科を超えてノウハウを共有する取り組みがいくつかある。1つめは、年3回の校内授業研究会だ。1回につき2教科が研究授業を行い、教師全員が参観して意見を述べ合う。13年度は国語、社会、理科、音楽、技術、家庭の6教科で実施された。

2つめは全体研修会である。授業で活用したワークシートや問題を持ち寄り、教科・学年混成のグループに分かれて共有する。12年度は12月に実施したが、「もつと早く知りたかった」「実践に生かせるアイデアがたくさんあった」といった意見が多数寄せられたため、13年度は8月に行った。

「教科を超えた研修は実践に役立たなければ、先生方の意識は高まりません。具体的な成果物を持ち寄って話し合うことで、議論が深まり、授業改善にもつながると考えています」(真子先生)

また、教科ごとに、スーパーバイザーとして研究協力を依頼している教育センターや教育事務所の指導主事などに、研究指定終了後も協力を継続してもらっている。13年度は、ほとんどの教科で同じスーパーバイザーに依頼できたため、新しく赴任した教師も取り組みを引き継ぐことが出来た。今後も教師の異

動があるため、ノウハウの共有と継承は引き続き重要な課題だ。

●成果と課題

自分で考え、意見を持つ大切さを入試の面からも説明したい

言語活動は準備や実践に時間が掛かり、導入をためらう教師は少なくない。その点について、原先生は次のように指摘する。

「言語活動は、時間が掛かるとは思いません。実際、今年の3年生は1月頃には教科書が終わり、入試に向けた問題演習や過去問対策に取り組むことが出来ました。高校入試では、説明や証明など言語能力を評価する問題も出るため、生徒も言語活動に意欲的に取り組んでいると思います」

社会科は一時、記述問題や資料を読み取る力を問う出題が増えたが、近年は記述問題が減る傾向にあるという。「授業が入試にもつながっていることを、生徒に実感してもらいたいと思っています。自分で考え意見を持つ大切さを、入試の面からも説明できれば、授業に向かう生徒の意欲は更に高まると思います」と真子先生は期待を述べる。

研究指定の終了から1年が経過し、教師の意欲の継続、ノウハウの共有はどの程度進んだのだろうか。教師の自己評価は厳しい。13年度のアンケートによると、「学びをひらく授業づくりを行うことが出来たか」という問

いに対して「とても」「まあまあ」と回答した教師は2割程だった。「全ての単元で出ていないという意味で、厳しい評価をされている教科もあるのかもしれませんが」と真子先生は語る。事実、「思考・判断・表現力を育む言語活動を意識して授業実践できたか」という項目では、ほとんどの教師が「出来ている」と回答した。教師の自己評価の低さは、取り組みに対する真剣さ、自分の指導に対する厳しさの裏返しなのかもしれない。

14年度、同校は「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業」の指定を受ける。「今後は特別支援教育の視点を教科の授業に生かしていく工夫が、学校全体の課題になります」と真子先生は言う。

もう1つの課題は、リアルな問いの設定、考えさせるワークシートの開発など、引き続き授業改善を重ねることだ。平川富久校長は、いかに授業を変えられるかがポイントになると話す。

「生徒が活動する時間を十分確保するため、ICTも活用しながら、指導をより工夫していく必要があるでしょう。また、そうして生徒に付いた力が学力にどう反映されているのか、成果を測る方法の研究を深めることも課題です。生徒に身に付けさせなければならぬ学力は何かを、教師一人ひとりが自覚し、取り組みを更に深化していきたいと思えます」

日頃からの5W1Hの問い掛けが生徒の心を耕し、考える力を育む

——高校入試の出題傾向から見る言語活動の重要性

現行教育課程では、「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」のバランスが重視されているが、知識・技能の習得を重視する傾向がまだまだであると聞く。2013年12月の上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウムで発表された高校入試問題研究結果も踏まえ、教員が意識を転換し、言語活動へ踏み出す重要性を提案する。

基礎・基本の定着に 完璧を求めすぎていないか

現行教育課程が全面実施されて2年が経ち、多くの学校において、言語活動を充実させるべく校内研修や教員の意識共有が進められていることが、弊社の調査から分かりました(P.4「課題整理」)。ところが同時に、「言語活動を行う時間が十分にとれない」ことを「とても感じる」と答えた教員は約17%に上り、「まあ感じる」も含めると、約68%が言語活動の時間が十分とれないことを課題に感じていました(P.5図5)。実際、中学校の先生方とお話をしている、その課題はよくうかがい

ます。理由の1つによく聞かれるのが、「高校入試を突破する力を付けることが最優先であり、まずは基礎・基本となる知識をしっかりと定着させなければならない」ということです。

知識・技能は確かに重要です。それがなければ活用できません。ただ、ここで少し考えていただきたいのは、「知識・技能を完璧に習得していなければ活用できないのか」ということです。例えば、テニスのサーブを打つ場合、10本中10本全てが入らなければ試合に出られないかといえ、そうではありません。3本しか入らなければ勝負にならないかもしれません。6本入れば試合は出来るでしょう。対戦相手がいて緊張感の中でサーブを打



ベネッセ教育総合研究所
グローバル教育研究室
主任研究員
加藤由美子
かとう・ゆみこ

◎グループ会社ベルリッツコーポレーションのシンガポール校
学校責任者等を経て、「ベネッセ子ども英語教室」カリキュラ
ムおよび講師養成プログラム開発等、ベネッセコーポレーシ
ョンの英語教育事業開発に携わる。現在は、ARCLE(※)に
てECF(幼児から成人まで一貫した英語教育のための理論的
枠組み)の開発、英語教育に関する研究を担当。

*ARCLE(Arcle, Action Research Center for Language Education)は、ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会
です。日本の小中高の英語教育の課題を検討するシンポジウムを開催
しています。詳しくは、<http://www.arcle.jp/>

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

場合と、相手がいないコートに向かつて黙々とサーブを打つ場合では、成功率も違うはず。試合を行うことで、練習で学んだ基礎的な技能が磨かれ、確かな力として定着していくのです。

サーブの打ち方が「分かる」からといって、必ずしもサーブが「打てる」わけではない——授業でも同じことがいえると思います。例えば、英語学習においては、単語や文法をみっちり勉強しても、外国人と英語で話したり、自分で英文を書いたり出来ないことが、長年課題となつています。覚えた単語や文法を使う練習を十分積んでいないから、いざ外国人を相手にした時に話すことが出来ないのです。習得した知識・技能が人生において使えるものとなるように、それらを使って思考し、判断し、表現する場面を授業の中でもっと設けてほしいということが、現行教育課程での改訂のポイントでした。

高校入試でも、知識を使い、考え、表現する力が求められる

それでは、高校入試では、学習指導要領の目指す方向に向かつて、知識・技能を活用する問題や思考力・判断力・表現力を問う問題が増えているのか。その疑問の答えの1つとして示したいのが、ベネッセ教育総合研究所が運営する「ARCLE」(*)が2013年12月に開いたシンポジウムで発表した、高校

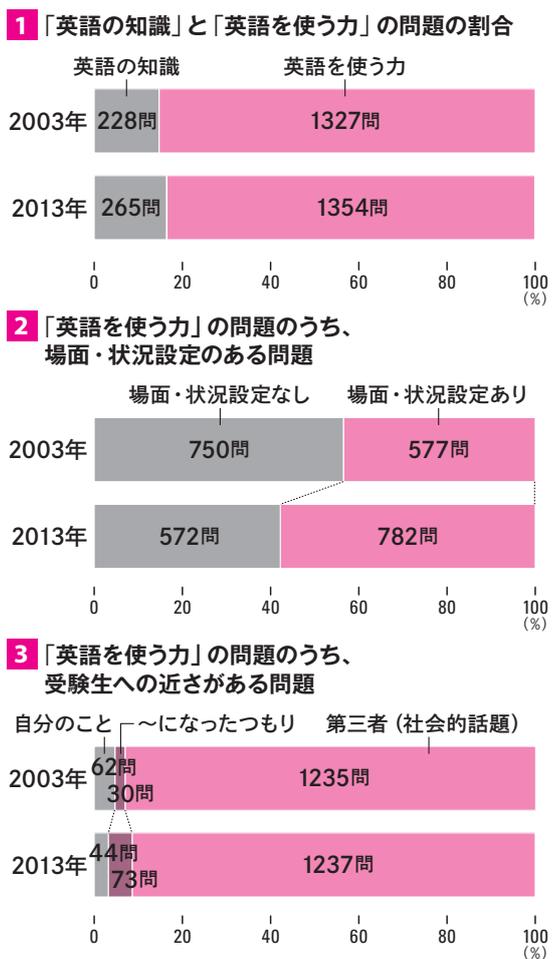
入試の英語の問題についての研究結果です。

47都道府県の公立高校入試について、03年分と13年分の英語の問題を調べたところ、03年、13年共に「英語を使う力」を問う問題の量は8割以上ありました(図1-1)。更に、「英語の知識」を問う問題と「英語を使う力」を問う問題の比率は、03年と13年とでほぼ変化はありませんでした。ここでのいう「英語を使う力」は、学習指導要領の観点別評価における「外国語理解の能力」「外国語表現の能力」であり、「聞く・読む」力、「話す・書く」力と、複数技能を統合して使う力を含めています。つまり、少なくとも10年前から、公立高校入試では、「英語の知識・技能を活用する力、すなわち思考力・判断力・表現力が問われていることが明らかになったのです。

分析観点別に見ると、「場面・状況設定」のある問題(図1-2)と、受験者への近さにおいて「〜になったつもり」と状況設定をしている問題も、少しですが増えていました(図1-3)。出題形式を見ると、語数を指定する英文記述問題が、03年の63問に対し、13年では101問に増えていました。リスニング問題を単独で出すことが減り、聞いた後で読ませたり書かせたりする技能統合問題が増えていくことも、特徴に挙げられていました。

私は3年前に進研ゼミ中学講座の教科研究で高校入試分析をしていましたが、英語以外の教科においても、知識を活用した、思考力・判断力・表現力を問う問題は既に出されていました(P.24図2)。知識を組み合わせ、複数の条件を基に考える力は、日常生活で起き

図1 高校入試 英語の問題分析の結果



出典/巨理陽一・石井亨・小川登子・奥住桂・加藤由美子・吉池陽子・根岸雅史「全国47都道府県の高校入試分析から考えるテストデザインと中学校3年間の指導」(2013 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム)

る問題を解決する力となります。高校入試でそうした力を測る問題が出ているのは、中学校卒業までにどんな力を身に付けてほしいのかというメッセージだと思っております。

知っていることで考える姿勢を身に付けていく

シンポジウムでは、高校入試問題分析の研究メンバーの先生3人が、良問と考える高校入試問題と、それに対応できる英語力を付けるための指導を提案しました。英語の指導ですが、言語活動の工夫として他教科にも参考になる点があると思いますので紹介します。

◎意識して読む「能動的な読解」へ

東京都立白鷗^{はくおう}高校附属中学校の小川登子先生は、「受動的な読解」から「能動的な読解」への転換を提案しました。ただ課題文を読んでも答えさせるのではなく、「次はどのような展開になると思うか」「あなたはどよう思うか」など、テーマに沿って投げ掛け、生徒に考えながら読解させるというものです。分析的かつ統合的な読解をさせるために、「タイトルから内容を予測させる」「キーワードからブレンディングを行わせる」「ばらばらになったパラグラフの並び変えをさせる」「トピックセンテンスとサポーティングセンテンスとのつながりを考えさせる」ことを取り入れているとのことでした。どの教科でも、課題文を読む時に何らかの目的を与えておくことで、生

図2 高校入試問題例

◎2009年度 茨城県の公立高校の国語

2つの課題文の内容を踏まえた上で、班の代表者としてクラスで発表する原稿を指定の字数で書くという問題が出ています。場面が設定されており、複数の条件を踏まえた上で、自分の意見を書く問題です。

◎2010年度 青森県の公立高校前期選抜の理科

日没直後に南東の空に見えた月の形を、解答用紙の破線をなぞって書くという問題が出ました。太陽・地球・月の位置関係、時間的条件などを総合的に把握しなければ解けない問題です。

徒の読む姿勢や読み取る深さが変わるのでないでしょうか。

◎生徒が考えたい、伝えたい題材を

埼玉県宮代町立前原中学校の奥住桂先生は、ライティングの指導ポイントの1つとして、既習事項を使うトピックをスパイラルに出していくことを挙げました。例えば、日記を書く活動も1回で終わりではなく、1年生、2年生、3年生と繰り返し、それぞれの段階の既習事項を使って書かせるそうです。また、教科書の本文をライティングの素材や模範解答として活用。場面絵を参考にして教科書本文を再生する活動や、1レッスンの中から物語の核となる英文を10文選び、つなぎ合わせてサマリーを作る活動などを行っていました。東京都千代田区立九段中等教育学校の石井亨先生は、リーディングからライティング

の統合的な指導では、それに適したユニット(レッスン)を探し、年2、3回指導できるように年間指導計画を立てることが大切だといえます。教材は、物語や説明文などを自分で読み、生徒が心を動かされると思うものを選び、既習の言語材料で例文を作成します。生徒の目線で書くことで、活動の目的や書く対象、必要な語彙や文構造が明らかになり、どのように評価を行うべきかも明確になります。また、最初から英語で書かせることも大切だと強調していました。初めに日本語で書く、それを英訳しようとして行き詰まってしまうからです。「今の自分に書ける英語」で表現するように指導しているといえます。

奥住先生と石井先生の発表に共通することの1つは、既習事項の活用です。こうした活動を繰り返すことで、何か正解があつて、それが出来ないと言ってしまうのではなく、今持っている知識や技能を工夫して活用するという意識が、生徒に根付くことでしょうか。

また、活動をする際は、生徒の内発的動機が生まれそうなトピックを選んでいることも共通項です。ある先生は、デイベートの題材は生徒に決めさせると言っていました。「AとB、どちらのキャラクターが売れると思う?」とあまり教育的ではなさそうなテーマでも、生徒が興味のあるトピックであれば、真剣に準備をして活発なデイベートになるからだと思います。「考えたい、伝えたい」と思えば、生

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

徒からいろいろな発言があり、より多様な考えや表現を共有できるでしょう。

◎3年間を見通した指導計画の重要性

また、3人の先生に共通しているのは、3年間を見通した指導計画を立てていることでした。卒業時の達成目標を立て、そこに向けて1年生から知識・技能を積み上げ、それをうまく活用する言語活動を取り入れていました。1年生で言語活動をたくさん行っても、2年生では習得中心の授業になると、思考力・判断力・表現力が磨かれていきません。ですから、校長や教科主任が主導して、1つの学校共通で3年間の指導を考えることがとても重要だと考えます。

答えが返ってこなくても 問い続け、考えさせる

最後に、シンポジウムやこれまでの自分の研究を通して、言語活動で重要になると感じたことを伝えたいと思います。

1つは生徒に問い続ける大切さです。質問をしたら生徒にはすぐに正解を言ってもらいたいと期待し、「うちの生徒では答えが返ってこないから言語活動は行いにくい」という先生がいるかもしれません。しかし、言語活動では、まずは「考える」だけでも十分です。「どう思うのか」「その理由は何か」など、5W1Hで投げ掛けて、普段から考えさせ、心を耕していけば、いつかは自分の意見として判断

し、それを伝えようと表現するようになるでしょう。「分かりましたか」と質問してしまつてたら、「分かりました」か「分かりません」と答えるだけで、考える余地がありません。

また、授業で行った言語活動を反映した定期考査にすることも大切です。思考力・判断力・表現力を問う問題がテストに出なければ、生徒は「本当は必要ないのだ」と捉えてしまふでしょう。同様の意味で、テストの得点だけで評価をしないことも重要です。活動中に見せる関心・意欲・態度もきちんと評価すべきであり、観点別評価はここで生きてきます。言語活動を指導に取り入れることは、指導時間確保の面、これまでと違う指導を行うという面で大変かもしれません。言語活動をうまく取り入れているスーパerteacherと呼ばれる先生方に、どうやってうまく出来る

ようになったのかをうかがってみると、とにかくトライ&エラーであることが分かります。重要なのは一歩踏み出す勇氣を持つことではないでしょうか。

教材はまず教科書が活用できるように。シンポジウムに登壇された大学教員は、自分が制作に携わった教科書は文法事項を学ぶ「習得ページ」と、実際の文脈の中で使う「活用ページ」で構成されているが、視察した中学校では多くの先生が活用ページを省略していても構わないと感じたと、発言されていました。英語に限らず、活用や発展のページが教科書にあると思います。まずそれを授業でしっかりと取り上げることが、言語活動を行う初めの一歩になると思います。

参考 文部科学省「えいごネット」



「えいごネット」は、英語指導に関する教材・素材・事例・指導案などが掲載されているポータルサイト。指導例や教材集めは、インターネットの活用もポイントとなる
<http://www.eigo-net.jp/>

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム
開催報告レポートのご案内

これからの英語の指導と学びを考える

—全国の高校入試分析結果と中高生の英語学習実態をもとに—

記事で紹介したシンポジウムは、2013年12月に上智大学で開催し、全国から270名を超える方々にご参加いただきました。中学校・高校の英語教育についての指導事例のご紹介や、ご参加の先生方とパネリストとの意見交換も行いました。シンポジウムの詳細なレポートは、下記ウェブサイトに掲載しております。報告書もダウンロードできます。今後のご指導を考える上でのご参考になりましたら幸いです。



詳しくは <http://www.arcl.jp/>

北海道北広島市立東部中学校

電子黒板を日常的に活用し 手法は教科を超えて共有

前号で述べた通り、ICTを使いこなす人材の育成は、機器の整備と共に重要な課題である。
今号では、「言語活動の充実」の研究の一環として、ICTの活用を盛り込み、授業交流で活用の観点と手法を共有することによって、若手からベテランまでほとんどの教師がICTを日常的に活用するまでに至った取り組みを紹介する。

School Data



北海道北広島市立東部中学校

◎ 1947 (昭和 22) 年開校。「夢をもち たくましく」を学校教育目標に掲げ、「心知体労」を育む活動に力を入れる。野球部が 2013 年度全国大会出場。校長 田島郁夫先生 / 生徒数 405 人 / 学級数 15 学級 (うち特別支援学級 3) / 所在地 〒061-1115 北海道北広島市美咲野 1-12-1 / TEL 011-372-3030 URL http://kitahiro-tobu.com/public_html/

北広島市立東部中学校の千葉貴志先生は、教室に入ると、まず黒板の横に備え付けてあるスクリーンを引き出した。大きさは、黒板の半分を占める 80 インチだ。そして、天井に備え付けのプロジェクトターのスイッチを入れ、タブレット端末を接続した。「教科書の 50 ページを開いて」と千葉先生が言うと、生徒は教科書を開きつつも、さっとスクリーンを見る。千葉先生は、ス

クリーンに映し出されたグラフにホワイトボード用マーカーで線などを書き足しながら説明し、生徒の表情を見てその理解度を見取っていく。続く問題演習では、生徒に配布したプリントと同じものがスクリーンに映し出された。指名された生徒が前に出て、解答を書き込む。そして、千葉先生は生徒の書いた解答に書き加えながら、解説していく。

「生徒の手元の問題と全く同じものをスクリーンに映すので、生徒は紙と黒板とを見比べる必要がなく、私の説明を集中して聞いています。一方、私は黒板に問題を書く時間が省け、生徒のグループ学習や個別指導に十分時間を充てられるようになりました。急いで進めているつもりはありませんが、例年より授業が速く進み、余裕を持って年度末を迎えられました」(千葉先生)

活用法を授業交流で教科を超えて共有

東部中学校では、大半の教師が千葉先生のように日常的に ICT を活用しながら授業を進めている。同校では 2010 ~ 12 年度に「生き生きと自己表現し、考えを深め合う生徒の育成 | 言語活動を活かした授業の研究」を主題として校内研究を行った。その過程で、12 年度に「北海道放送教育研究大会」の会場校となることが決まり、放送教育と ICT の活用も念頭に置いて研究が進められることとなった。一方、北広島市教育委員会は「学校 ICT 環境整備事業」を推進し、11 年度に市内の公立小・中学校全ての教室にプロジェクトターとスクリーン、ハードディスクレコーダー、無線 LAN を設置した。こうして東部中学校に ICT 活用を推進する意識と設備の両面が整った。同校は、全教師が取り組む授業交流週間を年 2 回設け、教科を超えて授業を見合い、



北海道北広島市立東部中学校
校長

田島郁夫

たじま・いくお 「授業を生徒目線で見て、気付いたことを先生方に伝えるようにしている」



北海道北広島市立東部中学校
教頭

津谷昌樹

つや・まさき 「本校の環境を生かした指導が出来るよう先生方を支援したい」



北海道北広島市立東部中学校
千葉貴志

ちば・たかし 1学年担任。技術科・数学科。前研究主任。「生徒がより理解できるように指導力を上げていきたい」



上/写真1 千葉先生の授業の様子。スクリーンに映したワークシートに生徒が解答を書き込む



右/写真2 体育の授業では、空手の演武を録画し、その場でチェックする。生徒は自分の動きを客観的に確認でき、教師は具体的に指示できるという

工夫を共有し、改善点を話し合った。その際、学習効果を向上させるツールとしてICTの活用を条件として付けた。田島郁夫校長は、ICT活用での留意点をこう話す。「ICTはあくまでも道具です。活用の意図と活用場面をしっかりと練り、ICTが適している場面に使ってこそ、効果があります。その観点と手法を教師間で共有するようにしました」

例えば、英語では、フラッシュカードやCDといった教具がパソコン一台に収まって指導の効率化が図れると共に、音声に合わせて画像が自動的に変わるなどの指導改善にもつながる点が評価され、ICTを活用する教師が増えた。また、教師にとって使い勝手がよいタイプの電子黒板であることも、日常的な活

用につながっていると、津谷昌樹教頭は説明する。

「本校の電子黒板は横から引き出すスクリーンタイプなので、場所を取らずに置き、しかも準備が簡単です。スクリーンには電子ペンでもホワイトボード用マーカーでも書き込めますし、黒板に投影すればチョークも使えます。設置から3年が経ち、プロジェクターの電球をいくつも交換するほど、どの教室でも活用されています」

「黒板の半分がスクリーンで占められるので、残す情報を書く黒板と、消えてもよい情報を映すスクリーンをうまく使い分ける必要があります。使い方が固定されず、教師がそれぞれ使いやすい方法を選べるのが浸透した一因だと思います」(千葉先生)

生徒にとってもICTは日常的なもの

校内研究のテーマは13年度に変わったが、教師のICT活用の状況は以前と変わらない。新しい指導案の様式にも、「ICT機器の活用」の項目は継続された。

「ICT活用度は教科特性に応じて異なりますが、その有効性は全員が認めています。視覚的な情報を加えて説明を補足する役割や、授業の効率化による時間の捻出など、教師の指導の幅が広がり、指導力向上につながりました」(津谷教頭)

生徒も授業の変化を感じている。文教科

学省「全国学力・学習状況調査」の12年度と13年度の結果を比較すると、「普段の授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」の肯定率が31ポイント増、「普段の授業では、本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていると思う」の肯定率も14ポイント増だった。更に、13年度に始めた学校独自の生徒による学習実態アンケートでは、「教材(視聴覚教材、電子黒板等)でわかりやすくになりましたか」の肯定率が大半の教科で9割を超えた。生徒にとって、言語活動もICTも日常のものになっている様子がうかがえる。

それだけに、今後問われるのは生徒の理解度を深めることだと、千葉先生は言う。

「生徒は前を向き、うなずきながら授業を聞いています。しかし、定期考査の得点が伸びているわけではありません。知識を定着させ、理解を深めるための工夫が課題と感じています」

「ICTの進展は、教師の指導法に大きな影響を及ぼしました。しかし、単に便利という理由ではなく、授業のねらいに照らし合わせて、指導過程、学習形態などを工夫してICT活用を考えなければ、授業力の向上にはつながりません。今後も、生徒の確かな学びを育てる授業改善を推進していきたいと思います」(田島校長)



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

自分らしさを生かした指導で 生徒の自主性や意欲を引き出していく

東京都豊島区立千登世橋中学校 **石川和代** 39歳



Middle
Leader

いしかわ・かずよ◎教職歴14年。荒川区立南千住第二中学校等に勤務後、同校に赴任して4年目。数学科担当。研修主任(2014年度から指導教諭)。12年「数学・授業の達人賞」(東京理科大学主催)で優秀賞を受賞。「豊島区名人先生」に認定され、東京教師道場で後進の指導に当たる。

これまで私が歩いてきた道のり

**他の先生のまねをしたら
生徒の心が
どんどん離れていった**

初めて担任を受け持ったのは教職3年目、任されたのは2年生でした。その学年団には、厳しく接することで生徒を引っ張るタイプの先生が多くいました。「自分の学級の生徒を落ちこぼれにはさせられない」と気負っていた私は、周りの先生のまねをして、怒鳴ったりするなど厳しく接したのです。ところが、厳しくすればするほど、生徒の心は私から離れていきました。結局、思うような学級経営が出来ないまま、1年が過

ぎていきました。

学級の状況を見て、私が担任を続けるのは難しいと判断されたのでしよう。進級前、校長先生に「3年生では数学の授業も多くなるし、担任は負担なのではありませんか」と言われました。担任を外される——それはつまり、生徒に「石川先生には力がない」と思われるということ。自分の力を出し切ったという実感がありません。生徒にそう判断されるのだと思うと、悔しくて、落ち込みました。

そんな時、先輩の先生に「無理して他の先生のまねをしなくても、あなたらしさを出せば大丈夫よ」と声

を掛けていただいたのです。私らしさ……以前の私は生徒の輪に入って人間関係を築きながら指導していましたが、初めての担任を意識するあまり、その持ち味を捨てていたのです。担当する数学の授業では「分かりやすい」と評価してくれ、授業を通して人間関係を築いてきた生徒もいました。「授業では生徒からの信頼を得て、生徒の学力も付いてきています。学級経営も別の方法で行えばうまくいくかもしれない。もう一度頑張ろう」と思えるようになり、私は「担任をやらせてください」と、強い覚悟で校長に願ひ出たのです。

**「大好きだ」という気持ちで
生徒に伝え続けたら
学級の雰囲気が変わった**

無事、3年生の担任に持ち上がった私は、本来の自分の指導スタイルに戻しました。1学期に心掛けたのは、生徒への思いを真正面から伝えることです。叱る時も「大好きだから叱る」ことを伝え、「なぜ今、それが必要なのか」を丁寧に説明しました。毎日の連絡帳にも「愛情たっぷり」のコメントを書きました。すると、次第に学級の雰囲気が

*プロフィールは2014年3月時点のもので

良くなり、「生徒がついてきている」と実感できるようになりました。そこで、2学期は、自分の言葉がより重みを感じられるように伝えたいと考え、「緩急を付けた指導」を目標にしました。普段はやさしくても、

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

学級経営力や授業力に 磨きをかけ、幸せに生きて いける子どもを育てたい

私の理想は、担任がいなくても、生徒が自分たちで学級を運営できるようにすることです。そのためには、「皆で力を合わせたり、人のために何かをしたりすることは気持ちが良い」「出来なかつたことが出来るようになるのはうれしい」ということを生徒に実感させ、自主性や意欲を育むことが大切だと考えています。

ここ数年は、授業と学級経営を連動させ、自主性や意欲を育む仕組みづくりを入れています。道徳や「総合的な学習の時間」では、グループエンカウターのルールを用いて話し合い活動を行っています。「全

叱る時はとことん叱る。規律を破つた時など、毅然とした態度で生徒に接しました。すると、生徒の間で「石川先生は怒らせたら怖い」という情報伝わり、声を荒げることもほとんどなくなっていました。

員が発言する」「相手の話を最後まで聞く」「人の意見をばかにしない」「プラスのフィードバックをする」「多数決で決めない」というルールを徹底させると、学級内に「積極的に発言しても大丈夫」「一生懸命やることがよい」という雰囲気が出てきます。数学の授業でも、同様のルールの下、グループ活動を積極的に取り入れています。学級活動で話し合いに慣れ、発言を受け入れる雰囲気も出来ているため、授業でも生徒は活発に発言しており、学習意欲が高まっていくと感じています。

そうした学級づくりを続けてきて、昨年、最も効果を感じたのは秋の合唱コンクールの時でした。リーダーの生徒の声が小さくて、周りに聞こえない時、体育委員の生徒がそ

れに気付き、「集合！」と大きな声を掛けました。リーダーが説明している時には全員がじっと耳を傾けて聞いていましたし、練習の内容や進め方は各パートリーダーが話し合っ自分たちで決めていました。生徒はそれぞれ自分が出来ることを行い、担任の私は場を設定するだけだったのです。結果は銀賞でしたが、生徒は達成感いっぱい、教室に

戻った後、再度全員で課題曲を熱唱し、頑張りたたえ合いました。学級が安定すると生徒の心も安定し、生徒は何事にも全力を尽くそうとします。生徒の自主性や意欲は、生徒や教師との信頼関係の上に育まれていくのです。だからこそ、学級経営力や授業力に磨きをかけるべく、日々努力を続けていきたいと思っています。

石川先生の取り組み

意欲を育む授業づくり

◎数学の授業では、興味を持って自分自身で考えたり、話し合いが出来たりするように、身近な事象を題材にして問いを投げ掛けるなどの工夫をしています。グループ活動を行うのも、周りの生徒との話し合いを通してさまざまな観点に気づき、知的好奇心を喚起させるねらいもあります。



葉を題材にして、数の規則性を教えている様子。理想は「5割教えて8割分かる」授業。解説をする前に、個人やグループでじっくり考える時間を設けている

小中高 教師が共に語り、オピニオンをつくる

Teachers' cafe

第2回ワークショップ 開催

全国から小学校、中学校、高校の先生方が一堂に会し、子どもの成長や教育について語り合う Teachers' cafe の第2回ワークショップを、2014年2月に開きました。その模様をお伝えします。

◎全国から小中高27名の先生が参加

全国から19名の先生に参加いただいた第1回のワークショップの様子は、本誌2013年度vol.4でお伝えしました。第2回は参加人数を拡大。第1回に参加した先生に加え、20代～60代の幅広い年代の小中高の先生27名が全国から集まりました。

今回、議論をより深めるために自己紹介の後に行ったのが、第1回の内容の共有です。オピニオンの模造紙を掲示し、前回参加者によるポスターセッションを実施しました。更に、ベネッセ教育総合研究所の研究者が、子どもの学習意識調査の結果や、今後100年の世界・日本の動向を踏まえた社会環境の変化予測を報告。子どもが将来どんな社会を生きていくのか、その時に求められる力は何かを思い描くための情報提供をしました。

◎「テストがなかったら」の前提で、教育の根本に迫る

議論の進め方は、今回もワールドカフェ形式を採用。まず、小中高の先生方が混合のグループをつくり、「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合いました。グループを3回替えながら、地域も学校種も年齢も役職も違う人たちの思いを聞き、視野を広げていきました。「テストや受験がない」という前提には「そんなことを考えたこともなかった」という意見も聞かれましたが、「評価がなければ何を教えたいか」「社

会で生きるにはどんな力が必要なのか」という教育の根本へと議論が深まっていきました。

メインは、「オピニオンづくり」です。課題意識が近い先生同士でチームをつくり、「12年間で身に付けさせたい力を小中高でどのように教えるか？」をテーマに、議論をまとめました。オピニオンは、チームで用いる言葉は違っていました。しかし、「社会を生き抜くためにどんな力を付けたらいいか」「そのために教師がすべきことは何か」という課題は共通しており、先生方の根底に流れる熱い思いは学校種を超えて同じであることを確認できました。

また、後日、ワークショップを振り返るきっかけとして、チームの代表の先生にオピニオンの内容を整理したレポートの提出を依頼しました。

◎今後も全国の先生方をつなぐ場として

日々のご指導で忙しい先生方にとって、学校種や立場を超えて、教育について熱く語る機会は限られるようです。参加した先生方からは「貴重な経験が出来た」「新しい知見を得た」といった声を多くいただきました。また、第2回ではベネッセ社員も議論に参加することで、学校現場に理解を深めることが出来ました。

今後も Teachers' cafe のような機会を持ち、学校種や地域を超えて先生方をつなぐと共に、先生方と共に学校教育について考えていきたいと思います。

ワークショップの流れ

- 13:00 **オリエンテーション、自己紹介**
- 13:40 **前回の内容を共有**
第1回参加者によるポスターセッションを行い、内容を振り返り、共有した。
- 13:50 **視野を広げる**
ベネッセ教育総合研究所から、教育を取り巻く社会環境予測について情報を提供。
- 14:00 **問題意識を共有する**
4人1組となり、ワールドカフェ形式で「テストや受験がなかったら、子どもに何を身に付けさせたいか」をテーマに語り合う。1ラウンド15分で、グループを替えながら3ラウンド。
- 15:10 **オピニオンをつくる**
「12年間で何をどのように教えるか？」をテーマとして、課題意識が近い者同士がチームをつくり、オピニオンをまとめる。
- 17:00 **発表**
9チームがそれぞれのオピニオンを発表
- 17:30 **まとめ**

第2回ワークショップ概要

- ◎目的 小学校、中学校、高校の先生方が率直に語り合い、「12年間で何をどのように教えるか？」を共に考え、現場教師発のオピニオンとしてウェブサイトなどを通じて発信すること
- ◎日時 2014年2月1日(土) 13:00～18:30
- ◎参加者 全国の先生方27名(小学校10名、中学校8名、高校・大学9名)
- ◎募集方法 『VIEW21』小学版・中学版・高校版の各読者モニターへのご案内など
- ◎会場 (株)ベネッセコーポレーション新宿オフィス
- ◎主催 ベネッセ教育総合研究所「Teachers' cafe」事務局
- ◎企画運営協力・当日ファシリテーター 与良昌浩氏(株式会社もくてき)、宮崎圭介氏(株式会社スコラ・コンサルト)

参加した先生方からのご意見・ご感想

・学校種が異なる先生と話すことによって、「学校教育すべき根本」が見えてくるのだと感じます。その根本を、行事、教科学習、総合的な学習の時間など、教育活動に沿って考えていきたい。

(小学校/北海道)

・他校種、他地域の先生と話し合いが出来、共通するものがたくさんあると分かった。教育についてこんなに熱く語る機会はまだでなかったので、とても有意義だった。

(小学校/秋田県)

・先生方との前向きな議論を通して、自分にはない、新しい知見を得ることが

出来た。「子どもへの教育」という点で、私たちは同志だと感じました。

(中学校/新潟県)

・前回とテーマの関連性が高かったので、内容を深化できた。もし、テーマが変わったとしても、学校種・地域の異なる教員が集まって熟議しオピニオンづくりをまたやりたい。

(中学校/愛媛県)

・今後の社会環境の変化の予測を聞き、50年後、現在の学校制度があるのかどうかと考えた。存続させることを考えるのではなく、変化を考えなければいけないと強く思った。他校種から得られた気

付きは多く、教科指導の改善だけでなく「学校」を考える上で、とても有意義だった。

(高校/宮城県)

・100年という長いスパンで日本を見るという視点が面白く、非常に興味を持った。一般企業や行政の方も参加できるようになると、具体的な話ができるだろう。今後に期待したい。

(高校/三重県)

・いろいろな意見を認め合いながら、時間内にまとめる作業は緊張感もあったが、とても達成感があった。

(高校/岡山県)

各チームのオピニオン

*全チームのオピニオンはウェブサイトをご参照ください

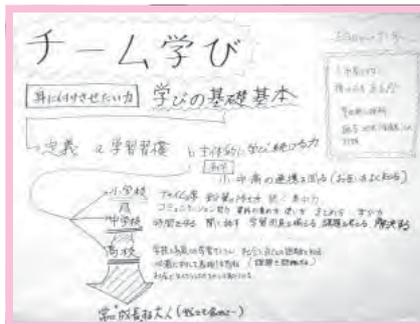
テーマ・12年間で身に付けさせたい力を、小中高でどう教える(育む)か

チーム「協力」



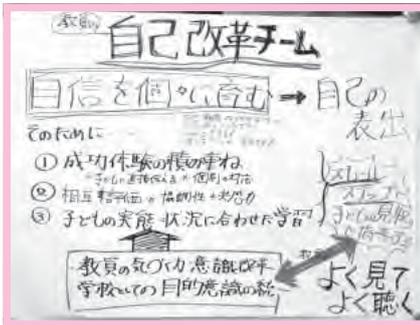
◎小中高が共通して取り組むべき指導の形として、「子どもが『夢中になれる時間と場所』をつくる」「安心して失敗できる環境(仲間と空間)をつくる」「『見通し』と『振り返り』を通して自己理解を深め、子どもの『メタ認知能力』を育む」ことの3点を挙げました。これらを実現するためにも、児童・生徒参加型のアクティブラーニングへの転換が必要だと提言しています。

チーム「学び」



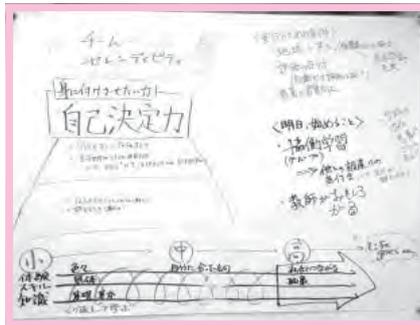
◎小中高12年間を通した学びのあり方そのものについて議論を深めました。特に、学校種を超えて育成すべき力を、「主体的に学び続ける力」と「学習習慣」に焦点化。いわゆる知識や技能の土台となる「不易」の観点を軸にして、小中高連携のあり方を改めて問い直しています。

チーム「教員の自己改革」



◎児童・生徒と、子どもに接する教師自身の教育観の改革に焦点を当てて議論を深めていきました。小学校・中学校・高校と、児童・生徒の発達段階がそれぞれ異なっても、見るべき指導のポイントには共通点も多いはず。「連携」の意味を、今一度問い直しました。

チーム「セレンディピティ」



◎たとえ、それが意図したものではなかったとしても、巡ってきたチャンスをしっかりつかみ取る力=セレンディピティ。不確実な世の中で、自分ならではの「みち」を選び、切り開いていくためには、自己決定力が大切だと考え、今後の社会の変化を見据えて議論を深めました。

Teachers' cafe 2014 開催決定

今年度は、幼稚園、保育所の先生にも参加してもらい、より長いスパンで教育について議論を深めます。詳しい内容や応募方法は右記ウェブサイトをご覧ください。

7/26(土)
新宿にて
参加無料

次回開催についてのご案内や当日の様子の動画は、ウェブサイトでご覧いただけます

Teachers' cafe ベネッセ で 検索

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

2013 Vol.4 特集「社会を生きる力を育む」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp/>)でご覧いただけます。

◎現在、次年度のキャリア教育の全体計画（3年間）を作成中です。「課題整理」のページを基に、これまでの自校の取り組みについて振り返ることが出来ました。また、校区の小学校と9年間を見通したキャリア計画の作成を検討しているため、大阪府ゆめみらい学園高槻市立第四中学校の事例が大変参考になりました。

[北海道／R中学校]

◎藤田晃之教授と谷合しのぶ校長との対談でどきどきしたのは「職場体験が恒例行事になっていないか」という問い掛けです。まさに自分が担当した学年は、前年度の内容を踏襲したものになっていたからです。進める側としては踏襲すると楽でよいのですが、工夫をしないと打ち上げ花火的になってしまう危険性があるかもしれません。その意味で、東京都荒川区立諏訪台中学校の実践はさすがだなと思われました。

[岐阜県／M中学校]

◎愛知県名古屋市立千鳥丘^{ちどりがおか}中学校の実践の中で、「ドリカムカード」がとても参考になりました。パーソナルヒストリーの見える化によって「根拠のある自信」を付けさせる取り組みは、1年生から3年間積み上げれば、生徒の自覚と自信と意欲につながる事が期待できそうです。やはりキャリア教育は、一貫性、計画性、方向性を教師がしっかり把握し、生徒を良い方向に引っ張っていくことが大切であり、限られた時間数の中で効率的、効果的に指導できるかどうか、成果が上がるか、上がらないかの分かれ目になると思います。

[東京都／K中学校]

◎今の時代に、果たしてどれだけの人間が「自分でな

れば出来ない仕事」に就くことが出来るでしょうか。興味・関心を中心とした教育観のまんえんや、自分探し、自己実現を強調しすぎたこれまでの教育や進路指導が、若者の職業への適応を困難にしていると感じています。1人の社会人となるためには、もしかしたら潜在的には存在するかもしれない、自己の可能性を時には断念してでも、それぞれが関係する組織の内部で割り当てられた役割を、素直に、誠実に引き受ける気構えを、今の学校教育で培っていく必要があると感じます。

[島根県／K中学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の中で、大分県佐伯市立佐伯城南中学校の國見義隆校長の「方針はしっかりと伝え、多くを語らず見守る」という言葉が心に残りました。リーダーとして常に念頭に置き、先生方との距離感を大事にしながら接してゆくことが大切だと思います。

[千葉県／F中学校]

◎「Benesse 発 これからの教育」の大分県立大分豊府^{ほうふ}中学校の取り組みを読み、本校では電子黒板が使われずに眠っているような現状から、人材育成の大切さを痛感しました。ICTを使いこなせる教員育成が、モノの整備よりも重要だと考えます。

[福島県／K中学校]

◎「ミドルリーダーの挑戦」の東京都墨田区立本所中学校の駒田のみ子先生の記事を読み、皆同じような経験をしてきているとしみじみ感じました。今、職員室で私の隣の席の先生は、新卒1年目の壁にぶつかっているようです。優しい周囲の声掛けがいかに大切であるかを、目の当たりにしています。

[北海道／K中学校]

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

田中洋一先生のインタビュー記事にある、「日頃から自由に話せる雰囲気をつくる」について、これは先生方の関係性にも当てはまるように感じました。『VIEW21』で取材させていただく学校には、先生方が風通しよくお話しされる風土があり、そこには校長先生のリーダーシップを始めとする信頼関係や団結力が土台にあるように思います。先生方に情報提供をしている我々もそうでありたいと感じました。

『VIEW21』中学版編集長 小林奈緒

VIEW21 中学版 2014 Vol.1

2014年6月2日発行／通巻第321号

発行人 谷山和成
編集人 小泉和義
発行所 (株)ベネッセホールディングス

◎お問い合わせ先

情報編集室
〒206-0033

ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満
撮影協力 荒川潤、川上一生、筒井岳彦
イラスト協力 カモ、幸剛

東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3390

© Benesse Holdings, Inc. 2014

色とりどりの学びの情景

海が教室！



表紙の学校 岡山県備前市立日生中学校



船に乗り込み浮遊するアマモをさおで引き上げる。漁師さんにアマモの生態や役割などを聞き、グループごとにまとめるワークショップも開いた



牡蠣の種付けは5月。日生町漁協の指導の下、生徒は牡蠣の幼生が付いた殻を一つひとつロープに付け、牡蠣筏に下げる。11月には牡蠣筏が置いてある漁場まで船で行き、牡蠣の生育状況を観察。そして待望の収穫は2月。藻の絡み付いた殻を丁寧に洗い、家に持ち帰って食べる



2013年11月に宮城県で開かれた「全国アマモサミット」で、唯一中学生の参加者として生徒2人が「アマモ場再生」の活動を発表

牡蠣の生産量で国内上位を誇る岡山県日生町。漁業が盛んな町にある備前市立日生中学校は、13年前から学校専用の筏で、生徒は牡蠣の養殖を行う。2013年度からは地域が推進する「アマモ場再生」に参加。アマモの回収などの活動を行うと共に、地元漁協関係の方に日生の漁業や海とアマモの関係について聞き取りを行った。ここで生徒は、アマモが海の中では魚の産卵場所や稚魚の生息地であり、更に海を浄化する役

目があることを知る。生徒にとって、アマモは海岸に打ち上げられて腐り異臭を放つ嫌なものだったが、日生の漁業に欠かせないものと分かり、生徒の活動への意欲は一気に高まった。夏休みを費やして聞き取り調査をパネルにまとめ、アマモの種まきでは、集めて腐らせた浮遊藻から、泥だらけになりながら種を取り出した。生徒が地域に出て、人々と話し、一緒に汗をかき、そして自分たちが暮らす地を愛する心が育まれていく。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2013

Vol.4 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

Vol.3 1人で学べる生徒を育てる

Vol.2 生徒の心に火をつける

Vol.1 主体的に取り組む言語活動の工夫

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または で

次号 Vol.2 は10月発行(予定)です